

囚われし妖怪の運命紀 行

震顛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如、ある異変で「鎖を操る能力」を得た妖怪、古明地さとり。その異変を見事に解決するも、自身の能力が戻ることはなかった。

しかもその異変で、彼女の立場は一気に危うくなる。

「異変で、全てが変わった。私は、一気に劣勢に立たされた」

この状況を打開すべく、彼女は「能力の持ち主」と「幻想郷とは何か」を探り始めるようになる。

目次

東方夢創録 〽 Fiction

or Reality?

前編 | 1

中編 | 24

後編 | 60

夢が朽ちた先には

10月28日 | 92

11月2日 | 95

11月5日 | 99

11月6日 | 107

11月7日 | 117

11月9日 | 126

11月15日 | 135

11月16日 | 139

11月17日 | 144

東方夢創録

F i c t i o n o r R e a l

i t y ?

前編

#1

あの嫦娥の1件から、一年経った。私は、あの一件後、巫女から、嫦娥追いの狐の弾幕情報を知りたく、博麗神社の元へ何度かその情報を貰いに行つたことがある。思えば、あれ以来、地上には出たことがない。そもそも、地上嫌いの私が、ここまで頻繁に出たのも、自分でも今になって驚いているが。

幻想郷内は大変なことになってるらしい。『波』を感じて能力が変わるといふ、摩訶不思議なことが起きたそう。地霊殿には、今のところ何も変化がないので、関係ない話だが。

そもそも間欠泉の一件以降、地上が怨念の塊みたいなものと感じてしまい、余程物事に囚われない限り、地上に出る気が失せてしまった。別に私が悪くもないはずが、一方的にボコボコにされてしまったので、仕方ないと思つて欲しい。まあ、今はこうして自

分の能力を応用して、スペルカードのコピーを頼まれることも多くなり、サンプルも貰えるのだから、研究も進めている。多忙ではあるが、何か物足りない。地上への憧れがまだあるというのか。

その報が来てしばらくして、第三の眼がゆっくりと瞑り始めた。異変の影響が時間差で来たのだろう。恐らく、もう相手を心読することはできない……が、私にとっては、むしろ朗報かもしれない。今まで、この能力に対してコンプレックスを抱いていたのだから。

妹は大丈夫だろうか。最悪なのは、再び第三の眼が覚める事だ。瞑っている状態が続いているのは、自分で潰したからであって、眼が自ずから瞑ったのではない。眼球は思いっ切り充血しているだろう。子供からしたら、その眼は狂気の塊であろう。おまけに、心も読めるということだから、彼女も、こもりがちになるに違いない。やっと人里の子供と馴染めるようになったというのに、これでは振り出した。

そう思っているうちに妹が帰ってきた……が、彼女の第三の眼は、明らかに眼が充血してる。眼の赤に眼を覆う全体の青。妹には申し訳ないが、気味が悪い。

「お姉ちゃん……。」

と、泣き寄るこいし。

「……こいし、どうかしたの？何か嫌なことでもあったのかしらっ。」

念の為、聞いてみる。

「それが……突然……め、眼が開いて……。遊んでただけなのに……。知らない人の声が聞こえて……。」

私は、彼女を抱いて、ただただ頭を撫でる事しかできなかった。

知らない人の心の声が聞こえるのは、私の（異変前の）能力でもよくあった。私は、長年この能力と付き添っていたので、深く考えなかつたが、こいしや人間には辛いことなのであろう。地上にいたから私より早く効いてしまったのだらう。精神も崩れかかっている。これ以上の質問は避けよう。まあ、異変の影響なのは分かつた。ただ、これを放置すると、こもりがちになってしまう。異変を私の手で、迅速に対処せねば。

そういえば、能力が変わつたとは言えど、自分自身、どんな能力なのだらうかと辺りを見渡した。すると、見覚えのない魔法陣が一对。

「何なの……これ？」

*

（魔法陣なら、どこかと繋がってるはず。何か出してみよう。）

そう思い、私は、手を縦に振ってみた。何も起きない。ならば、と今度は魔法陣に念じてみた。すると、細長い物体が勢いよく飛び出し、前方の壁に刺さつた。黒い鎖みたいた。ただ、出したは良いものの、引つ張つても戻らない。引き戻すよう念じてみると、

むしろ自分の方が壁に引き寄せられた。靴がやられる。

今ので感覚は分かった。つまり、この一對の鎖を使って移動ができるということだ。更に良い事に、引き上げる速度が速いため、ほぼ直線的に移動できる。確信がついた。つい、ニヤけてしまう。

(これは幻想郷でも最強級なのかもしれない……！)

後、もう一つすることがある。スペルカードの作成である。大体のスペカは、札と同じ大きさの紙に手をかざすなり何なりすると、自然にカードが生成されていく。だから異変後、能力変化者は新しいスペルカードがいつの間に、と思っっているだろう。

私のスペカの研究で分かった事だが、スペルカードは、ある程度、法則性を持つて生成される。自機中心に拡散するもの、ホーミング、速度・弾量……という風に、弾幕展開に關しても多くの基礎記号でスペカは形成されている。その基礎記号を全て解読し、全種のカードを作成するのが、当面の私の目標だ。

さて、手をかざす。6枚並べたうち、紋が出てきたのは2枚のみだった。しかも、今までのスペカと違う。というのも、弾幕自体を示すような記号が見つからないのである。むしろ、スペカには魔法陣が4つ描写されているものや、双剣を表す記号があった。近接型と見て取れよう。端に、何かへブライ語のようなもので書かれていた。辞書を用いて解読すると、それぞれ、

4つの陣の方に「懺悔の鎖」

双剣の方に「洗礼と靈魂の鎖」

と、書いてあることが分かった。外界にあるユダヤ教の十二天使の一人、「ウリエル」のことを指しているのだろうか。上のは、なんとなく想像がつくが、下のは、双剣を扱えるのは分かるも、他は全くだ。なんだかわくわくして、またニヤけてしまった。今まで、戦闘の殆どを、コピーしたスペカでほぼ再現した弾幕を展開していたに過ぎなかったのだから、攻撃的かつ、個性の持ったスペカは、扱いても作りもしなかった。

文々の天狗から新聞を貰った。今夜、博麗神社に集まって欲しいとのことらしい。どうやら彼女も、能力が変化してしまって、今までの飛行ができずに不満気味である。どうやら、空気を扱えるようになったという。普段は、地上を嫌っているの、こういうのにはあまりに行きたくないのだが、妹のため、また情報収集のため、今回に限り、「……分かりました。行きます。」

と答えた。紙、スペカを描くための筆とインキ、そしてスペカに関するノート……、と最低限のものは用意した。異変が解決するまでここに戻らないように。妹は、ペットらに任せた。訪問者には絶対対応するな、と教えているものの、精神衰弱者と鳥頭がいるから、信用ならない。ましてや、身内に裏切られると、自分の家が荒れてしまうので、余計面倒だ。外に錠でもかけておこう。

……地上に出るのは一年ぶりだ。

#2

地下世界にいと、どうも時間感覚が狂ってしまふ。外に出ると、もう既に日も傾き始めており、肌寒い。確か、午後7時に始まると新聞には書いてあつた。

深い森を抜けると、人里に入った。こいしは、いつもここで遊んでいたのだろうか？中を横切ろうとすると、子供がひよこつと出てきた。そしてこう問いかける。

「こいしおねーちゃん知らない？さとりおねーちゃんなら知ってるでしょ？」

私は、言葉詰まらせてこう言つた。

「……お姉ちゃんにも分からない。でも大丈夫。私が代わりに見つけてあげるから、こいしちゃんの事は心配しないで。ほら、もう夕方だし。」

これが精一杯だつた。こいしは、あの、波、の後、遊んでいた子供に何も言わずに帰つてきたという事になる。もちろん、そんなことは言えない。心の声が聞こえるのが、彼女にとってどれだけ切実な悩みだつたのか……。

それを深く自問自答しているうちに、長い階段が見えて来た。神社に向かうには、最後長い階段を上らなければならない。そこで、周囲に人がいないことを確認し、例の鎖の能力を使つてみることにした。鎖を鳥居の上部に突き刺す。それを魔法陣が引き上

げると、身体が持つてかれるように鳥居に引き寄せられ、斜め上に直線移動した。数秒だった。幸い、上にいた人は、霊夢を取り囲んで見てなかったようだ。そういえば、引き上げる時、「ジャラジャラ」という音が鳴ったが、それは聞こえなかったのだろうか？ 面倒事に巻き込まれないように、第三の眼を隠し、あえて人混みに隠れるような場所に座った。

いつもは、宴会が開かれたりする時に一同会すというのはあつたというが、こういう話題で集められるというのは珍しいという。もちろん、ここで今回の異変の対応という堅い話をするというのは、大半の人が慣れて無く、ピリピリしてる人もいれば、困惑している人もいる。確かに、普通なら、あの魔法道具使いや、あと1人連れて行つて解決するが、各地の長をわざわざ呼んできたということは、犯人探してもやるのだろうか？ 呼んだ本人がやってきた。7時より遅れている気がするが、なぜ決めた本人が時間にルーズ過ぎるのだろうか。

「話題は当然知ってるでしょうねえ…。」

私含む一同は黙りこむ。間を開けて永遠亭の賢者が答える。

「ええ。あの、波、は、中々強いものでしたよね。」

確かに、と他も同調する。当然、地下にいた私は強かったのかどうか分からないが。

「やはり感じてたのね…。ということは、ここにいる全員が能力変化者ということだ

いいのかしら?」

「そうともいかないな。」

そう言ったのは、魔法道具使いだった。さらに、今度は人形使いがこう言う。

「確かに、私達は、波を感じた。けれど、魔理沙の八卦炉が使えなくなったのも、私が人形を使えなくなったというのものないわけなのよ……。」

「ということは、魔法能力者は弾かれたということねえ……。」

まあ、魔法は発現ではなく、修得するものと考えれば無理はない。つまり、魔法は個性ではない。そう考えると、能力変化者は、発現する者、すなわち個性がある者という事になる。

巫女がそう言うと、今度は何の能力に変化したかと聞き始めた。固有能力が変化してない人を犯人だと思っているだろうか?

月の賢者は、薬が一切作れなくなった代わりに、回復魔法に近い能力を得たそうだ。紅魔館の主は、大槍は使えるものの、吸血鬼固有能力がなくなった。完璧な不老不死を手に入れたという事か。……あーっ、いちいち書いていくと、キリがなさそうだ。

こう見ると、能力が変化したとはいえず、下方修正にあたる者はいなく、むしろ強化されている。相対的に、変化がない者は不利だ。つまり、この時点で魔法能力者は対策メンバーというふるいから除外されることになる。となると、仏僧もか。

*

遂に私の前にあの巫女が来た。やり方が汚いな、こいつは。

「あなたはどうなの。珍しくここにいるけど。」

「今回の異変は今までと何か違う、私にもよく分からないので、情報収集のために来たという、しょうもない理由ですよ。」

私は、微笑してこう答えた。

「何か違うのは確かんだけどね……。で、あなたはどんな能力に化けたの？」

駄目だ。最初、嘘をつけて乗り切ろうと考えていたが、あいつ特有の勘で、更に面倒なことが起きそうだとにかく話題を逸らしてみよう。

「そういえば、霊夢さんは何の能力を手に入れたんですか。さつきから人に聞いてばかりで、自分のことをあまり言っていない気がするのですが。」

「後で言うわよ。そういえば、あなたなら、第三の眼を見れば充分分かるわねえ……。」

無理やり論点を変えても駄目だった。すると、巫女は、私の瞑っている第三の眼を探し始めた。私は、その腕を掴み、

「勝手にボディチェックをするのはやめてくださいよお……。」

と、巫女を煽った。言うなれば、宣戦布告という所か。

そもそも、他の人の能力を聞いた辺り、私の能力が一番汎用性が高く、強力だ。つま

り、ここで自分の能力を公表すると、間違いなく、「討伐してくれ」と言われる。例え私
が拒否しても、だ。受け入れたら受け入れたで、仮に私が討伐したら、今度は幻想郷中
でヒーロー扱いされて、いち早く家に帰れない。少なくとも天狗からは取材を申し込
まれるだろう。あくまでも、目的は妹を救うことだ。本末転倒である。

話は戻す。私のあからさまな煽りに、巫女は睨み返すばかりであった。私の第三の眼
に勘づいたのか、こう言った。

「……目、瞑ってるでしょう。」

様々な感情が見え隠れする。これには、私も素直に、

「まあ、そういう所ですね。」

と認めるしか無かった。ただし、卑屈に笑って。やはり、最後まで隠し通すのは無理
があったか。いや、まだ能力が知られていないからバレたとは言えないか。まだいけ
る。

「瞑った、ということは、あのテレパシーの固有能力も失ったはず。嘘も程々にした方が
いい気がするわ……。」

食い気味で私はこう返した。

「私は、ただ情報収集で地上に出てきたのですよ？それなのにそこまで他人の能力を知
りたいのです？」

さらに続けて、

「目的が見え隠れしているんですよ……。あなたが何をしたいのか、とか。」

と付け足した。巫女は、ギクリとした。異変前の第三の眼のおかげなのか、なんだか今日は勘が冴える。

「今、ここでそれを言ってもいいんですか？ いや、言われちゃあ困るでしょうねえ……。」
考えてた事はズバリだったようだ。

「ま、まさか、あなた……。」

巫女は、自分が見抜かれたと思って小刻みに震え始めた。自尊心を保つためなのか、震えをかなり抑えているだろう。こっちは勘だけで物を言っているが。

「ええ、ただ第三の眼の能力が私自身に移っただけですよ。」

私は、笑顔でこう言った。自分でも、これは強硬論すぎると考える程、愚弄な策であった。指先は、嘘がいつバレるのだろうかとかクククしている。ただ、もうここまで来れば、自論で押し倒すのはもう必要ないだろう。

怖気付いたのか、巫女は、これ以上の尋問を避けた。更に、他の人から能力を聞き出すのも止めてしまった。もうこれ以上勘が冴えるのはないだろう。時計をちらつとみた。正確な時刻までは分からなかったが、短針が10を指していたのは確かだった。かれこれ3時間経過だ。

再び静まり返る。場を乱してしまったのを、私の眼中には無かった。自分の秘密を防衛できたのが相当大きかったからである。これで、心置き無く一人で黒幕を討伐できる。

「霊夢さん、月の方の確認取れましたあ。」

あの天狗だ。わざわざ月まで飛んだのだろうか、あるいは何らかの交信手段があるのか……。

「そう。それで、月には影響がなかったのかしら？」

天狗はこう答えた。

「また嫦娥？を倒すために純狐さんたちが行ったようなんですが、能力が変わった、とかそういう問題ないらしいです。ただ……。」

「ただ？」

「サグメさんがいないらしいんですよ。月の都じゃなくて、何処に行ったのか……。」
忘れてたけど、と言ったのは巫女の相棒だ。

「守矢のメンツも来てないぜ？文、ちゃんと全部行ったのか？」

天狗はこう答える。

「そういえば、あそこも行っただんですが、木々で神社が守られていて、近寄れなかったんですよ……。」

「もしかしたら、守矢神社と関係ありそうわね……。」

巫女はそう言つて、急ぐように取りまどめ始めた。

「もう今日は遅いし、出発は明日にしましょう。当然、敵も出てくるでしょうし、強化されてる人達で対応にあたりましょう……。」

特有の怠け癖だ。人間には影響ないと考えたのだろう。これがあるから1人で行動しなかったのだ。

「さて、もう日も跨いだし、今回はお開きよ……。」

*

会合が終わった。あの中であいつは、後で教えると言つといて、結局、最後まで自身の能力を明かさなかった。その後、誰とかは忘れたが、巫女と話しているのを盗み聞きした辺り、どうやら彼女は、物体反射能力を持ったというこらしい。盗み聞きしたのがバレたのか、あいつが私を睨んできたので、私も睨み返した。

……あいつとは、完全に確執ができてしまった。このままでは私の命が危ない。逃げる様にして神社の階段を下った。

目的地は守矢神社だ。

神社が関わっているということは、守矢の事だし、派手な宗教活動でもやっているんじゃないかと思った。まあ、神社に行つて、元に戻すように懇願すればいい話である。長とはいえど、別に頭を下げるのには抵抗がないので、とつとと終わらせたいところだ。そういうえば、さつきから誰かがついてきている気がする。神社を出たあとからだ。このまま振り切りたいところだが、むしろ、近づいている気がする。後ろを振り向くいても誰もいない。気のせいなのか……？

「誰かいるのですか？」

人妖がいると踏まえて、こう質問した。すると、知らない声が木々の中から聞こえてくる。

「バレちゃしようがない。」

と出てきたのは、桃のついた帽子が特徴的な人だ。

「あなた誰です？」

「比那名居天子つて名よ。ていうか、私あの中にいたよね？」

…そういうえば、いた気がする。確か、この天人は、私みたいに、自分の能力は変化していないと言っていた。むしろ、能力がひとつ減ってしまったって、要石が動かせなくなつたのだ、と。前述で、下方修正はないと断言したが、この天人に対しては、まだ隠している能力があるのでは、と疑っていた。

「突然だけど、貴方もう心読能力を持ってないでしょう?」

まさか突然だった。会って早々、あそこでついた嘘を見破られたのだから。

「あ、あなたは私に何を……。まさか、あの巫女の刺客……?」

驚いたばかりに、口調が安定しない。天人が出した答えは意外なものだった。

「え、霊夢? いやいやいや……。」

と、笑いだし、

「私、あいつの神社を人質に取っているんだよ? 刺客に選ばれるくらい私のこと信頼してないぞ、あの巫女さん。」

そういうえば、彼女の要石は、博麗神社の下に埋められていると言っていたか。

「じゃあ、なぜ私を追いかける必要があったんです?」

「簡単だよ。あなたの能力を確かめに来たくってね。確か……。」

彼女は、意表を突くことをを口にす。

「あなた、鎖飛ばせるでしょ。」

天人は、誰にも明かしてない今の私の能力まで当てたのだ。ここまで当てられるのは、もう固有能力しかありえないレベルだ。

「流石、正解です。もしかして異変で当てられる能力を得た、とか……。」

「そういう所みたいね。でも、あそこで言うことでもないから、隠してもいいかなー、っ

て。」

「それが当たりですよ。あれはただ、対策メンバーの選定をしていただけでしたからね。」

「まあ、あれで面倒事に巻き込まれるのは分かったな。」

良かった、同情者がいた。味方がいるだけでも充分だ。

「さて、お前の能力……ちよつと見せてくれないか？ていうか、スペカに『双剣』ってあつた気がしたんだけど、修行ついでにどうさ？」

まあ、鎖を扱えるようになっただけで、双剣が扱えるようにはなつてはいない。初めて使うタイミングを逃してしまいそうなので、

「是非是非。1回使ってみたかったですよ。」

と、私は、この修行を受け入れた。

*

天人が、赤い剣を取り出す。異変後も、緋想の剣は使えるようだ。

「さあ、そちらさんもスペカで剣を出しておくれよ。能力を知りたいのよ、能力。」

何やかんやで久しぶりの戦闘だ。魔法陣を出現させ、スペルカードを発動させる。

「双剣『洗礼と靈魂の鎖』」

と。すると、双剣が、それぞれ1本ずつ出てきた。2本の剣の性格が違う。一方は、白

い気を纏い、もう一方は、黒い気を纏い……。

「ほおー、片方ずつ性格が違うとは。中々珍しいスタイルだな。」

「持ったはいいんですけど、無闇に振っちゃいけませんよね、これ？」

「まあ、まずは自分の思ったふうに振ってみな。」

そう言われたので、突っ込むが如く横に一閃。しかし、天人はそれをヒラリとかわしてしまふ。その後も思うがままに双剣を振り続けるが、かわす一方だ。しまいには、剣が森の木に刺さってしまった。ふと見上げると、天人は、その剣の上に乗っている。

「うん雑だな。初めてだから仕方ないのかな？」

天人は、そう言って刺さった剣からヒョイッと降りる。

「思った通りに振ったままですが……。」

「それにも程があつてな。いいか？ 剣の使い方はな……、さとり、ちよつと劍借してくれ。」

と、私から黒気を纏った剣を取る。すると、天人が

「ア、ギアアアアア!!」

と叫ぶ。

「て、天子さん!? 大丈夫ですか!?!」

「でも気持、ち、い、……。」

なんだこいつ。マジもんのマゾかよ。まあ、体が丈夫だから、体がやられる事もないだろうな。

「どうやら、天人は今の、「あー、理解した。」らしい。

『程度』じゃ括れない能力あるな。黒気を纏っていると、白気に対してキラーを持つ。という事は……。」

と、今度は白気を纏った剣を取る。天人の身体には、何ともない。

「うーん、白気は逆だな。今度は黒に対してキラーを持つてる。やっぱお前、強力な能力を持ったな。」

「私がこう問いかけた。

「……どういふ事ですか？」

「この双剣、うまく使いこなせば、人間以外はほぼ一撃で倒せるぞ。例えば、白は『聖』とか、『善』とかの属性。反対に、黒は『穢』とか、『悪』だな。人間は、その中間にいるから、ただの剣と化すけど。」

なるほど。さつきは天人故に食らったということか。もはや鎖を扱う能力じゃない。

「能力が分かったところで、続きやるかー。開始早々逸れてしまつて悪かつたな。」

「いえいえ、比較的早めに知れて安心しますよ。」

笑みで返す。

「引き続きよろしくです。」

「踏み出しが肝心なんだ。特に、飛べる人妖はね。あのひと踏みだけで常人より距離を稼げるのだから。」

と、天人は、右足を軸にして飛ぶようにして走る。

「そのままの勢いで、空気抵抗に負けずにそのまま横に振るっ！」

振った剣は大木の硬度に負けず、真つ二つに切つていく。断面が綺麗だ。

「あとは、相手の動きを予見できるようにしないといけない所ね……。まあ、これに限っては鍛錬しないとダメなんだけど。こんな感じね。ほら、今言ったことをやってごらん？」

言われた通りにやってみる。軸足を思いつきりつけて後ろに蹴るがが如く走る。その勢いに、片手剣を力いっぱい大木の方に振る。切り抜けるかと思つたが、勢いは、半分で無くなつてしまう。

「おや、単純に筋肉不足かもね。」

筋トレなんてしている暇なんてない。かといって、これでは相手に力負けしてしまう。私がそう考える内に、一つの賭けに出ることにした。

「……いや、1つだけ、加速できる方法があります。」

「ほう……。ならそれでやってみな。加速するもんなら何でも、ね。」

私は、もう一つのスペカを取り出した。あの、

「鎖符『懺悔の鎖』」

を。すると、魔法陣が二倍に増え、自由になった鎖が増えた。一対を森木に刺し、鎖を引いて高速で直線移動する。双剣を広げ、空気抵抗に耐えながら同時に振る。二本の大木が、綺麗に倒れる。異変前において、スペカを二枚同時に使うのは、御法度であった。しかし、この能力は、「鎖符『懺悔の鎖』」を中心に、色々な能力をカスタムできるという、吹っ切れた能力だ。この能力を幻想郷トップという理由の一つだ。つまり、「双剣『洗礼と靈魂の鎖』」は、ただの、デバフカードではない。

「おー、発想の転換か。やるねー。」

「これで、一つ目は完遂しましたよね？」

「もうここまで来れば、あとは対人戦を重ねるしかないからな。でも、ありや全然感を読んでないからな、無理がありそうねえ……。」

「懺悔の鎖を使う前と比べないでくださいよ。そこら辺は、1度当たってから言うてください。」

と、微笑む私。それに天人は、

「しょうがない、もう少し付き合ってやるか。」

と、やれやれ顔で返事した。

「……ほれ、さつき教えた通りのことをやってみな。」

私は、一双の鎖を大木に刺して移動しながら、天人を襲った。当然、天人は、それを避けるが、鎖を引き戻して、別の方向に飛ばして対応した。やっていく内に、次どこに行くのかわかってきた気がした。いや、誘導されているのかもしれない。「ならば。」と、私は裏をかく戦法をやってみた。攻めたり避けたりのださくさに紛れて、地面に鎖を刺す。刺さった地点に着いて、今度は引き出す鎖の反発力を利用して上へ一気に飛ぶ。天人は、それを見上げた。今宵は満月だった。逆光で私が暗く見えたのか、天人には私の目が光って見えたらしく、

「なんだ……あれ。妖しく眩いて……？」

と眩く。その隙に、私は、また地面に鎖を刺し、双剣を併せて思いっきり振った。流石に剣術を教えられてる身で、殺すわけにはいかない。わずかに刃をそらす。天人は、急に我に帰った。拍動がこっちにも聞こえてきそうだ。

「あなた……、何者？天使……？」

相変わらず気の抜けた話し方だ。

「何を言っているんですか？ただの妖怪ですよ。まさか、幻覚でも？」

「いえ……、何か憑依^{うけよ}ってるわ……。天使かなんかに。」

後に天人から聞いた話だが、あの時、私は、残像ができるくらい目が光っていた。そして、幻覚なのかわからないが、翼が見えたという。その形相は、まるで、天使が降臨

するかのようだった、と。

*

「私が教えられるのはここまでよ。ところで、これから守矢のどこ行くんでしょ？」
「ええ。」と私が答える。すると、天人が意味深なことを言う。

「能力が変わっただけが異変ではない。守矢の輩は、また別のことを考えていると思
うぞ。」

「……つまりはどういう事です？」

この問いかけに、天人は、
「さっきあなたを追っかけてる途中で、何か赤い線みたいなのが見えた訳よ。何なのか
なーって後ろ振り向いたら、誰かが走ってたのよ。……博麗神社に。」

と、嫌な予感を想像させることを言った。その時だった。博麗神社の方から大きく物
音が鳴った。何か冷気が伝わってくる。上がって天人とその方向を確認すると、博麗神
社の所だけ、どか雪が降りしきる。地面からは、ここからでも見えるような氷が突き出
ている。

「ほーら、始まった。霊夢も予測が甘かったな、こりゃ。」

そして、私の方に振り向いて、

「気を付けな。相手は能力が強化されてるんだ。鎖操れたって駆使しなきゃ意味無い

からな、すぐ逆転されるぞ。」

「……分かってます。」

と、私は答えた。

「よし、その意気だ。こうやって修行したんだから、しつかり妹を助けるんだぞー。そんなじゃ、私は、人里に行つて被害でも確認しに行きますかね。」

そう言つて、天人は、森の闇に消えていった。

“能力が変わつただけが異変ではない。”これが何を指しているのか？派手な宗教活動ではないことも滲ませていた。この言葉に、何か尋常でないものを感じる。守矢の輩は、一体何を考えているのだろうか？

……早苗め。

中編

#4

「鎖」。タトゥーでいうと、「束縛」を意味する。つまり、自分の心を閉じこんでいる状態とも言える。この解放は、「自由」を意味し、可能性を秘めることになる。別の側面で見ると、その能力にもまた「束縛」されるといふ事になる。どちらが本当の「自由」なのか、これは、難題になりそうだ。

森を抜けた。朝になるも、一向に陽が昇らない。そもそも、月すらもう落ちていいる。前を見ると、金髪の幼女が一人。

「あなたは……、ルーミアさん。まさか、あなたがこの状態をつくったのですか。」

「確かに私だけど、理想郷を作るためには仕方ないの。」

「り、理想郷……？」

『『全て、唯一神様のお作りになられた、無駄のなき世界。』それが理想郷。あなたは、その抵抗者。』
プロテスト

宗教じみてて気味が悪い。まあ、戦闘は避けたい所。

「あの、治してほしい時はどうすれば……。」

「なら、私の前で膝まづいて“罪”を告白しなさいな。スーって視界が良くなるから。」
膝まづくという事は、神の前に屈服するという事だ。まずい予感しかしない。

「……何を言っているのです?」

「神の使徒としての行いだよお。」

「神の使徒?何を言っているのです?さつきから支離滅裂で、あなたの意図が読めな
……。」

「治さなくていい?ならあなたは……、異教徒ね。」

「へ? (い、異教徒……。)」

聞き出していくと、急に相手が戦闘準備を始めたので、私は困惑するしかなかった。

「唯一神様から、『異教徒は排除せよ』って言われているの。さて、殺ろうか。」

滲み出る殺意。これは、彼女を倒さなければ先に進めないというのを示していた。仕方なく、これには応じることにした。

*

盲目に近い状態での戦闘である。となると、命中率も下がってしまう。修行の後とはいえど、戦士の勘は磨いてもらっていない。拙い予測で攻略できるのだろうか?

とりあえず、双剣を召喚する。両方とも白い気を纏っていたのは見えた。対象によって自動的に判断されるようだ。視界の狭い中、何とか彼女を見つけ、剣を振るが、それ

を避けてしまう。

「おや、もう終わりかー。なら、こっちのターンという事ね。」

と、少女は弾幕を展開した。手前の弾しか見えない。寧ろ近づきにくくなった。避けるのに精一杯だ。

「こりや近づけないよね？そっちも弾幕を展開したら、勝機はあるかもだけど。」

実はあの異変後、私は、弾幕が撃てなくなってしまった。鎖の能力が強力な故であろうか。突破するには、双剣しかない。

安全地帯を見つげながら、ジリジリと近くまでは寄ってこれた。その先には岩山がある。そこで、魔法陣を増やし、一対の鎖を岩に向かって突き刺した。そして、少女に向かって勢いよく移動し、通り魔の如く剣を振り、過ぎ去る。彼女の袖を何とか切りつけた。私を睨んできた。完全に獲物を捕らえる目だ。

「……ならっ！」

と、彼女はスペカを発動した。

「暗黒『天照の岩屋戸』」

と。すると、何か幻覚のようなものが見え始めた。別に幻覚くらいなら、たかが知れているので問題なかった。しかし、それが邪魔なのである。更に視野が狭くなってしまった。そこからの弾幕展開は、難易度を高めている。

「円拡散3重、旋回1重と……、自機狙い？」

分析していると、この弾幕が割と面倒な構造だったというのが分かった。避け続けて近づくのが難しい。自機狙いは特に、正面から突っ込むことを躊躇させる。

「効果が切れるのを待つべきか……。」

盲目と幻覚の中、必死で安全地帯を探した。やっと見つけるも、自機狙い弾が邪魔してくる。

何を思ったのか、私は、剣で弾を切ってみた。横の一閃は、弾ひとつを破壊する。連鎖して、他の弾も。

「何っ……!?!」

幼女は危険に思ったのか、すぐに効果を取り消し、次の弾幕を展開する。

「蛍灯りし純粹夜」

確かに、視界は蛍の光の如く不規則に点滅する。面白い事に、弾幕もだ。しかし、弾幕の形式が単調的だった。そのうち、彼女のような教徒は、多様性をなくされているのではないかと思いはじめた。つまり、捨て駒なのでは、と。その視点で彼女を見始めると、いつの間にか、彼女を「倒す」のではなく、戦意喪失させ、どう「解放」してあげるかが自身の課題になっていた。

そこで、瞬間に見えた視界を頼りに一旦上昇し、相手の背中を地面に合わせた。その

まま地面に一双の鎖を刺し、急降下する。さらに、片方で弾を切って突破口を作り、もう一方で彼女を切りにかかる。彼女を戦意喪失させるには、一度切りつけるだけで十分だ。何せ、あの強靱な天人の身体をも反応を起こすのだから。

命中させたのは、左横腹だった。戦意喪失程度の大怪我で済むには、血管と臓器の位置的に、ここしか考えられなかった。しかし、かなり深く切ってしまったようで、

「うぐ……ッ！」

と、彼女は、痛みに悶絶するばかりだった。

*

視界が晴れた。陽は昇っている最中だった。

(戦意喪失はさせたけど……。)

別に少女には大きな変化が見られない。見当違いだったのだろうか。

「その能力で……、何がしたいんだ？」

「単純に、妹を助けたいだけ。寧ろ、これが原動力よ。さて、黒幕は一体誰？」

「唯一神様は、偶像を拜めてはいけないと仰った。そもそも、唯一神様が黒幕な訳……。」
「なるほど、分からないのね。」

偶像崇拜禁止って、外界のイスラームみたいに厳格なのだろうか？

「でも、こんな風に宣教しているってことは、誰かが広めるよう命令したって事でしょ？」

誰が言ったの？」

「そこは、守秘が絶対だから、教えられないね。」

「守秘……。随分と厳格ねえ……。」

「ところでさ……。あれだったら、怪我治してくれない？もう襲わないからさ。」

「治し方わかんないけど、なんとなく目処がついたし、やってみるか。」

剣に黒気を纏わせて、再び腹を切る。すると、傷がみるみる回復していく。同属性は、逆に回復機能があると思ひ、やってみたが、上手くいった。

「……痛くない。やるじゃん。」

私の事を見直してくれたようだ。

「こんな恩があるし、流石に襲わないわ。先、お行き。」

その時だった。幼女が突然、仰向けに倒れる。それをなんとか私が支えた。上を見ると、何か邪気みたいな物が、彼女から抜けていくのが見えた。

「ねえ、どうした？」

彼女は、気を失っているようだ。

(誰かに操られてたというのか……?)

そしてあの言葉を思い出す。

“能力が変わっただけが異変ではない。”

(……黒幕は、守矢の輩ではない?)

なら、この邪気は一体誰によって植え付けられたのか?……そういえば、あの会合の時、サグメという奴が月にいないと聞いた。

「薄々は気づいていたが……。」

サグメは守矢神社にいる。そして、守矢の輩と共謀している。賢者と手を組まれたら……、余計面倒だな。

#5

感覚狂っていてあまり実感ないが、二度戦闘して、徹夜したことになる。普段、規則正しい生活をしてきたというのに、何だか傷ついた気分だ。それでも疲れていないという事は……。やれやれ、私は、隠れた戦闘狂なのかもしれない。いや、自覚している以上、末期ではないか。

さて、昼前ぐらいだったか、飛んで守矢に向かっている最中、前方から人らしいのが飛んでくる。……私目掛けて。危険を察知して避ける。すると、私の方に戻ってきたのだ。さてはどちらかの刺客だな。戻ってきた少女は、書物でしか見たことはないが、日本人の服装のように見える。

「なんだー。真正面にいたのにぶつかってくれないのか……。残念な。」

「むしろ、ぶつかってくれる方が異常でしょう。何の展開を望んだの、あなたは。」
「へへ……。」

何か、邪気みたいなのを感じる。あの朝の時と同じ……。何か、自然と身構えさせる。
「一応、念の為に聞くけど……。あなた、何を信仰してるのよ？」

「唐突じゃのう。うーん、意図がよく分からぬが、一言で言うなら……。」

「……『唯一神』じゃな。」

「やはり……。」と、私は後ろに下がる。日本という国は、東洋故に多神教国家だ。西洋国家のような、唯一神信仰はないはず。ましてや、イスラームみたいな唯一神信仰は、日本では……！

スペカを発動させ、双剣を準備する。

「……あなたが信仰しているのは、邪教よ。今すぐ、こっちに戻ってなさい。」

「か、改宗などせんわ！新たな能力で、我を怒らせた事を後悔させよう！」

*

初手からスペカを発動してくる。

「第一曜『先勝』」

布石のスペカか？六曜なのは気になるが。まあ、今のところ何も起こってない。

倭人が何かを呟いている。

「三十……二十九……二十八……。」

何かの時間だろうか？そんな事は気にせず、接近して切りかかる。

「おわっ!？」

心中、すぐ終わると思っていた。時間を数えて、静止し続けたのだから。しかし、このあと、私は驚いた。この一撃は、確かに当たるものだった。彼女も思っていただろう。それを不意に避けたのだ、……奇跡的に。

(確実に当たってただろうよ……。)

「……おろっ。」

これには、倭人も驚く。単に運がよかったのか？そう思っているうちに、カウントも、

「十……九……八……。」

と、10秒を切っている。

(『先勝』は、午前が吉、午後が凶。……なるほどね。)

一本取られた。これから起こる厄災を、一定時間受けなければならぬのだから。

「五……四……三……二……一……。」

やるしかない。この時間を超えてみせる。

「……零。」

厄災を乗り越えた先に何かがあるか？六曜に忠実なら、次に来るのは、「友引」だ。

本当に厄が降ってきた。弾幕が上からだ。相手が、どこにいるかも分からないくらいの濃度である。弾を切り裂いていき、安全地帯を無理やり作り出す。それすらないとか崩壊しているじゃないか……。いや、さつきまで弾幕展開がなかったからそのツケかなら妥当だな。

……そんな事を思っている場合じゃない。連鎖爆発で周りの弾は無くなっていく。しかし、それ以上に弾幕量が多く、爆発はしばらくすると消えてしまう。おまけに、頻繁に近くで爆発するのだから、常にヒヤヒヤしている。(あれ、今日やられるんじゃないかね?)と。妹を助ける目的がなければ、既に折れていただろうな。

上から「切り漏らし」の弾が降ってきた。

(まずい、終わるッ！)

やられるのを覚悟した。条件反射で、意味無いのに頭を守ってしまう。……しかし、上から降ってくる気配がない。

「やはり、1枚で仕留めるには無理があつたか。否、我をもつと楽しませてくれるのじゃない。」

「私にも使命があるのよ。ここでやられる訳にはいかないし。」

「ここで、私は一つの疑問をぶつけてみた。」

「私自身でもこゝろと思つたのに、なぜ止めたの？」

と。しかし、

「ほう……。なら、全力で!!」

という感じで、疑問に全く聞く耳を持たなかった。はあ……。聞いた私が馬鹿みたいだ。

続いて二枚目のスペカ、

「第二曜『友引』」

が発動される。考えてみれば、これ含めてあと5回なんだな。

……なるほど。さっきの疑問の答えが出た。全てのスペカが、1分しか効力がないんだな。さっき、倭人が30秒きつちり数えていたのも、その為か。

次は友引だ。朝夕が吉、昼が凶。誤差（と言っても弾幕が濃すぎて、体感だと、全然その範囲ではないと思うが）を考慮すると、20秒から40秒といった所か。すぐに動くと眩いているのが聞こえない。2秒で決める。

「十……。九……。」

40秒か。さっきより長く降ることが確定する。

（是が非でも止めん!）

と、無防備な所を突つ切るが、「奇跡的」というレベルで避ける避ける。……。これも能力の内か。

例の如く、弾幕が降ってきた。さつきと同じような立ち回りで臨んだが、同時に打開策を練っていた。

(何か、何か気付かねば。)

ふと、名案を思いついてしまった。ひっくり返せば、迷案なのだが。

(賭けになつてしまふが……。)

よし、決めた。一枚飛ばして、「仏滅」で攻勢する。その為には、「先負」で一つやらねばならぬ事があるな。

流石に疲れる。息切れし始めた。強制的に計一分余り双剣を振り続けたのだから、腕もつらい。

「ほう、やるのう。まだ我には手がある。降伏なら今ぞ。」

「うーん、白旗上げるのはまだ早いなあ。それより、『大安』がどうなのか気になるね。多分、一切弾幕が展開されないはずだけど。」

「そこまでたどり着く自信があるか。素晴らしい。」

何故か褒めたたえられた。その前の「仏滅」で乙るとでも考えたのか。随分と樂觀的な思考をした者だ。

3枚目。どうやら、読みは当たったようで、

「第三曜『先負』」

を繰り出してきた。午前が凶が故、開幕から高濃度の弾幕が降ってくる。弾幕を被った所で、私は、双剣体制で切り裂くのを止め、片手のみでどこまで耐えられるか試してみた。

（これが出来れば……。）

守備線が、ジリジリと自分に近づいて来る。極力、無駄のないように尽力した。……ある所で、その線が止まった。頭上10cm前後だ。

（ギリギリだが、いける！）

手応えを感じた。あと20秒。これに耐えれば、勝機がある。

「20……19……18……。」

あの倭人と同じように、数を呟き始めた。精神安定も兼ねてだ。当然、相手は、片手で抑えているのも、数を呟いているのも分からない。

「10……9……8……。」

10cm維持のまま、半分を切った。だが、油断も隙も与えてくれない。いや、むしろ有難いというべきか。5秒を切った所で、また双剣体制に戻した。バレないように、念の為だ。

「2……1……、0。」

弾幕が消えた。後は「吉」が30秒続く。休憩時間と言うべきか。

「ここまで3枚……。やるのう。じゃが、次の『仏滅』で潰れるのが見えるぞ、我は。」
倭人が、煽っているように見えたので、私は、沈黙を返した。

「なぜ黙っておる？怖気付いているのかね？まあ良い。『仏も滅入る程の大厄』を貴様に落としてやろう。……覚悟せよ。」

(さつきより濃い訳、ね……。)

遂に運命になるであろうカードが発動される。

「第四曜『仏滅』」

「仏滅」は、一日中大凶。1分丸々弾幕が降り続くという事だ。しかも、今以上に。

受けてみると、確かにそうだった。濃さで言えば、1.5倍と言った所か。10cmの守備線を守るのも難しかった。

安定した時は、守備戦が10cmより若干下回ったが、片手でも抑えられた。方向は、ほとんど変えていない。

「やるなら、今だ。」

決心した。

自由になったもう一方の剣を、反対に持ち替える。その剣を、槍投げのように真っ直ぐにぶん投げる。直後、濃すぎる弾幕で、視界不良だったのが、一気に晴れた。……ど

うやら、命中したようだ。

「お、お主……、どうやって……。」

「胴体に命中しなかったのは良かったわねえ……。」

当たったのは肩だった。大怪我ではあったが、乙らなかつた分、まだ良いのでは、と自画自賛した。

「し、質問に答えよ!!」

倭人にこう言われてしまったので、私は、こう返した。

「あなたの能力……『六曜』って、私だけじゃなくて、全体にかかっているんじゃないかな。例えば、『吉』の状態なら、私も、あなたも『吉』という訳だし、逆も然り。」

「なら……、なぜ我は当たったというのか？」

「確かに、『吉』の時は、あなたの方が運が上だった。常人以上の運を手に入れたのなら、それは、六曜を身につけた時の付属能力ね。ただ、運というのは面白いものよ。蛇口みたいな構造なのだから。簡単に言えば、栓を“締めた”という所ね。たとえ運が残つてたとしても、大凶の前では意味なかつただろうし。」

*

共に地面に降り立ち、私は、彼女と同属性の気を纏つた剣で、傷付けた怪我を治し始めた。

「……我は、負けるべくして負けたのか？」

「そうねえ……。実際、勝敗なんて運がかなり左右するし、『1/2を外した』と言った方が正しいのかもね。」

「運を操るのは難しいなあ。」

彼女は、笑みをこぼした。つい、私もつられてしまった。

治療が終わった。

「……ふう。これでどう？」

「もう、すっかり良くなったぞ。楽しき戦だったぞよ。ホッホッホ。」

直後、邪気が倭人から抜けていくのが確認でき、彼女は倒れた。私は、その彼女を抱いた。つい、感情が崩れてしまった。

「よく……自分”を守れたな……。」

#6

よく、「此々が120%です！」と、ありもしない確率を使って話の具体性を高める人がいる。そのような概念は、私にとっては到底理解できない。円にすると一周を超え、20%と同じになってしまう。かといって棒にすると、今度はハミ出してしまう。「新たな可能性」も実に不可解だ。その対象の確率は、一つしかないのだから。……まあ、確

率・可能性は結局、常に一本のベクトルでしかないという事だ。

邪気が抜け、どうやら倭人が気を失ってしまったので、木陰のある涼しい場所に彼女を寝かせた。すると、後ろから、聞いたことのある、大人びた声が。

「ふーん。貴方にも、こんな優しい面があったとはねえ。常に、人妖に対して冷たい態度を取っているのかと思っていたけど。」

私は気怠く後ろを振り向く。後ろにはスキマがある。……私の予想通りだった。

「あの時能力を明かしていたら、きっと貴方は、霊夢に従属していた。賢明な判断だったかもね。」

「……褒めているつもり？」

「ええ。でも、霊夢にとつては、その行為が不都合だったらしいけどね。」

「じゃあ、なぜ『賢明な判断』と言いながら、霊夢さんサイドについたのは？」

すると、婦人は変なことを言い出した。

「霊夢に対する反乱因子は、私たちが抑えている。霊夢を敵としている者は、私達で徹底的に抑える。これで初めて幻想郷の平和が保たれるわけよ。」

言っていることが、よく分からない。なんだか飛躍しているような……。私は、この言葉の意味を熟考した。反乱因子、これを抑えることで得る平和。……そして、私はある二文字が思い浮ぶ。

（“統制”……？）

博麗大結界で現世と分離しているのは、もつと他の理由が潜んでいるでは、そう感じた。多分、その一つが“統制”なのであろう。

「さて……。」

と、婦人が言った。

「霊夢の敵は、幻想郷の敵。真の平和が訪れるまで、しばらく引つ込んでもらおうよ……、覚悟しなさい。」

何とかして、賢者との戦闘は避けたかった。しかし一方で、今なら勝てるかもしれない、という余裕もあった。

（今の能力なら、喪失まで追い込めるかもしれない……！）

*

フィールドは草原。鎖を刺すのも限られる。私は、鎖を飛ばす反動で、一気に上昇する。婦人は殺気立って、私を追っかける。スキマを使い。

（スキマの能力は変わっていない……。なら、何の能力が？）

とりあえず、戦闘パターンは、今の所1つなので、双剣で落とすしにかかる。再び地面に刺そうとした。しかし、何故か、空気がそれを拒否したのである。いや、

（自分の周りにも結界だ?!）

彼女は、私をもて遊んでいるとでもいうように、気味悪く微笑んでいる。

「このままでと……!」

この危険にすぐ気づいた。すぐさま、結界に刺さった鎖を剣で切り抜き、鎖をしまう。切り離された鎖は、外側から消えてなくなっていく。

「何なの、この能力……」

婦人は、微笑して返した。

また鎖を飛ばして、体制を整えようとしたが、全て、スキマに潰されてしまい、意味がなかった。万能すぎだろう……。

彼女は、スキマを作り出し、手を突っ込んで何かを取り出した。しかし、その“何か”が、とてつもなく強力だった。

「まさか……」

と、声が漏れるほどだ。

「“確率”を信じなさい。ま、あなたは、非科学を信じないだろうけど。」

そう言って繰り返したものは三つの月。すなわち、

「『フェイスアポロ』……?」

(何でも取り出せる、て言っても、バランスというのがあるじゃない……。)

しかも確率補正によって、フェイスアポロは、高性能なホーミング弾と化していた。

人為的に強化されたスペルは、私をさらに追い詰める。切ろうにも1発で壊せない。というのも、この双剣には刃がない。このスペカの名前が「剣」ではなく、「鎖」であるのもそれが理由であろう。あくまでも、「鎖」の域を出ない。また、婦人が使用しているスペカの元々の使用者は、「純粹」によって強化された妖精である。属性が中性的で、ただの棒となってしまう。

……左腕が痛み始めた。見ると、袖が破けているおり、皮膚が赤んでいるのが見える。
（擦り傷……。この異変で初被弾、ね……。）

真正面に来たら1発で乙るな、そう感じた。倭人の濃弾幕より使い方が上手い気がする。

彼女は微笑む。

「被弾しても冷静でいられるなんて、素晴らしいわ……。」

その笑みが、殺意を余計際立たせているのだがな。

「でもねえ、私が一度ケガをさせたら、その傷口を広めることが出来るのよ。」

と言うと、私の腕の擦り傷が、次第に酷くなっていく。すぐに分かった。

（『生存率』……ね。）

何故、編み出した答えが「生存率」でも驚かなかったのは、彼女は根本から乙らせるような事はしないと考えたからだ。別に彼女がSだということでは無い。賢者特有の

慈悲があるのではないかと。

まあ、じきに左腕が使えるようになるのは見えた。敢えて、もう使わない。問題は、使わない一つを含んだ3つをどう使うか。一旦、体制を整えるために、地面に降り立とうとした。

しかし、彼女は容赦しなかった。着地予定地点に、スキマを張っていたのだ。そこからは、無数の手。

(どこかにでも引きずり込む気なの……。)

再び上昇するが、スキマの手はそれ以上の速さで私を追い詰め、ついに足を掴まれた。幸い、手自体に属性が帯びていたので、使える右手でスキマから伸びる手を一振り切り離すことが出来た。

「あら、もうお終い？」

婦人は、物足りないような様子だ。

「あなたの能力は、確かに強いのだよ。だけどね、あなた自身がそれを使い切れてないの。」

「なぜ足りない？」

と、わたしが問うと、彼女は、

「可能性を信じていないからよ。」

と、帰ってきた。

「可能性……?」

「そう。信じてみなさい『可能性は100%以上ある』という事を。貴方の能力は、元が強力なのか、スペルカードの能力が本来の力より抑えられてる気がするのよ。これが最大可能性であっても、私の目を照らすと、まだ伸び代があるように思えるわ。」

これも、私には理解できなかった。というのも、幻想郷を作った者が、可能性について語り始めるとは思わなかったである。おそらく、最強級（確かあと数人いたはずだから）の妖怪のほずなの。何となく、綺麗事にも感じられる。冒頭で述べたように、確率は100%まであるただ一つのベクトルでしかない。当然、私はこの言葉に気が障った。

婦人は、話し続ける。

「貴方……、もしかしてこれが最大能力と思っているの?なら、一回ポケット中のスペルカードを見てみなさい。これは、貴方の可能性ではなくて、このスペルカードの可能性だけだね。」

(スペルカード……?)

疑問に思いながら、右ポケットに入っている二種のスペルカードを取り出す。

(まさか、私を騙そうと……。)

私は彼女を疑った。

「変わった様子はないけど、何をしたつもり？」

「こう尋ねると、」

「もつと、よく見なさいよ。」

と、返ってきた。そこで、私は裏を見る。

(双剣は、変わったような様子はないけど……。)

今度は「懺悔の鎖」の方を見る。……右端何か書いてあった。

(裏には本来、何も書いてないはずなんだけどなあ……。)

と思いつながら、その文字をまじまじと見る。

「……『Lv. 2』？」

「そう。そのカード、自動で強化されるのよ。今現在、貴方の本領はここまでよ。」

「ここまで……。ということは、私はどうあがいても、あなたに勝てないという事？」

「ええ。その気になれば、貴方の生存率を低めることなんて可能よ。」

この言葉で、これ以上喧嘩を売る行為をするのは、やめた方がいいと悟った。

「はは……。こりや私の負けね。」

*

降伏宣言をしても、婦人は、一向に私を拘束しようとしないう。話の流れから、私をあ
の巫女に突き出すのではないかと思っていたのだが。

「……先行くけど、いいの?」

私がそう言うのと、

「ええ。この先、貴方が勝てる見込みなんて無いけれど。」

と、返ってきた。拘束する意思すらなさそうだ。

「……本当に行くけど?」

「だから、良いって行っているでしょう。」

私は、一度ため息をした。まあ、彼女の言うように、勝機がないのは事実である。そのため、私は何も出来ずにいた。

一方の彼女は“月”をしまった後、一枚の札を取り出した。それを持って、私に近づく。「貼った後、痛いかもしれないけど、その辺は許して欲しいわ。」

やっと拘束されるのか、と最初は思っていた。しかし、その札を背中に貼られると、一発、後ろから殴られたような強烈な痛みが、体中を伝播した。耳鳴りがして、何も聞こえない。その際、私の目の前には、男性とも女性とも取れない、中性的な姿をした天使が、一人立っていた。

(何……あれ……?)

瞬きをした後には、もうあの天使の姿は見えなかった。気付くと、痛みも収まっていた。

「ま、こんな感じね。これで伸び代は埋まったはずだけど。」

と、婦人はやり切った顔で言った。ポケットにあるスペカを確認した。いつの間にか、二種類増えている。

(腕と、拳銃……?)

もはや、鎖のイメージとは、かけ離れたものだった。

その後、私は左腕を出して、患部を治してもらった。敵ながら、快く承諾したのは、「この先、そこから辺のより強い能力者が出て来るからね。」

というのが理由らしい。

彼女に、ひよんな事を聞いてみた。

「正直、あの巫女が勝つ見込みはあるの?」

婦人は、この事に首を横に振る。

「彼女も分かっているでしょうね。自分が、全ての人妖に対抗しうる力を持っていない、要は『退化した』、というのを。この異変で、全員の能力が強化されたなら、今の霊夢の能力は、私達妖怪にとっては雑魚なのよ。」

と、付け足して。

「らしくないねえ。擁護する気は無いの?」

「こればかりは本人も自覚してるわ、多分。」

「じゃあ、私を助命した理由って……!」

と、私が言うと、

「行きなさい……。」

と、遮るようにして言った。

「貴方は、強大な敵を倒せる唯一の能力者。同じ目的なら、私達は味方よ……。」

「……それってどう言う?」

その後、私は答えを聞く事なく、彼女の何らかの確率で、守矢方向に飛ばされた。あの言葉は、表面上のことだけなのか。「同じ目的」である以上、今回は譲歩したただけなのだろうか。

(面倒事に巻き込まれなければ良いけど……。)

*

「何だろう、この香り……。彼女の中から、『解放』の意志を感じる……。」

婦人は、この時に現実世界線から離れて行くのを僅かながら感じ取つたらしい。しかし、私はそれを感じ取れなかったし、ましてや“統制”の事すら記憶の片隅にしか残っていなかった。

……妹の思いが先走ってしまったのかもしれない。私にとって、大きな失態だ。

100年前だったか忘れたが、当時、新刊だった「我が闘争」という思想書を、外界から取り寄せてもらったことがある。確か、著者は確か……、A. ヒトラーだったかな。この人は、徹底的に「ユダヤ」という人達を叩いた結果、国の頂点に立った。そして、その人達の弾圧を展開した。そんな悪人にも関わらず、私は、その人の本を後生大事に取っている。もちろん、やっていた事は、あまりに非人道的で擁護できないが、大きな要素として、最初、この本を読んだ後に一つの感想を思いついた。

（彼は天才だ。最高の演説能力を持っている。）と。

やはり、金がある神社は違うな。綺麗な参道まで用意してある。石畳が、丁寧に敷き詰められている。その長い長い道を進んだ先に、博麗のものとは比べ物にならないくらい大きな鳥居。その下にいる人が点みたいだ。

（いや、鳥居の下に人……?）

よく見ると、異次元に行けるような、人が入れるくらいの狭間もある。精神を研ぎ澄まして、鳥居に向かう。

何かが飛んできた。妖精かなにかだ。すかさず、剣で切り裂く。

「おや、誰か来たようで。」

鳥居から聞こえてきた。近づくと共に漂ってくる、今まで感じたことのある邪気。ただし、凄まじく。

「あなたが……、あなたが、全ての元凶の……！」

迫り来る妖精達を避けながら、私は前に進んでいく。

「全て」とは、酷い言いがかりな。」

近づいていくと、次第に顔が分かってきた。その人が、異変を起こした張本人だと思っていた。だが、私の予想とは、大きく違っていたのだ。

「私が全てではないぞ？ 私含めて3人だな。」

「それでも、あなたが関わっていたのは変わらないでしょうよ……、天邪鬼！」

「まるで、憶測の上で話している様だな。」

邪鬼は、そう言つて私を嘲笑する。いかにも冷静、という感じだ。

「なんとなく思ったのよ。異変なのに、『刃向かってくる妖精が少ない。』と。今の攻撃で、その答えが分かった。……言うまでもないけど。」

この時までには私は、彼女の能力を何となく見抜いていた。邪鬼は溜め息をし、気怠げに話し始めた。

「ああ。確かに、私がそれに関しての首謀者なのは間違いない。勘が鋭いなら、もう分かっているはずだけど、この異変で扇動能力を手に入れたんだよねえ。」

「扇動」……、「洗脳」ではなく？」

「ただの演説能力さ。そのの、何がいけないとでも？」

予想と大きく違っていた。邪気が、何かしら接触して入っていったのではなく、吹き込まれる形で組み込まれたとは。

「……意図を持って吹き込んだのは事実でしょう？ まるで、あなたに非はないような話し方だけだ。」

「当然。私は、“扇動”しただけだ。後は、自分で考えて行動している。全て私の所為、で済まされる事じゃないだろう？」

これ以上問うところで、屁理屈で返される始末だ。

「はあ……、それより奥にある狭間は何？」

「さあね。」

「いつまで白を切るつもりなの……!」

私は、邪鬼に少しずつ歩み寄る。私が近接戦に長けているからだ。しかし、その後邪鬼はこう高らかに言った。

「さあ妖精達よ、我が善良なる策に匙を投げる者が現れた！ 必ずや、我々が勝利をもぎ取ろうぞ！ 唯一神様の御加護がある限り、我々が敗北することは、断じてないのだよ！」

そう言うのと、どこからか小妖精達の束が私を囲む。中からは、「やってやるぞー！」や、

「東になれば、上級妖怪なんて……！」と言った声が聞こえる。意気揚々とした様子だ。「扇動」ねえ……。外界でも多くあったけど、歴史的に言えば、『すべて失敗している』のよ。残念ながら、今回も失敗しそうね。」

*

邪鬼は妖精の戦意を煽っている。直接戦闘に介入しないあたり、指揮以外に能力はないのだろう。しかし、指揮能力は凄まじいものであった。

彼女が使っている戦法は、人海戦術に近い。妖精といつても、種類は豊富のため、攻撃も多彩である。しかも、明らかに一撃で落としているはずなのに、また立ち上がって私に立ち向かっている。あたかも、自ら玉砕を望むように。

(これが扇動能力……)

「大衆の受容能力は非常に限定的で、理解力は小さく、その分、忘却力は大きい。……先程述べた本の内容の一つだ。さっきまで洗脳されていた妖怪とはワケが違う。」

思えば、なぜここまで小妖精が出てこなかったのか疑問に思っていなかった。むしろ、今までの異変と大きく違う点だというのに。その答えがこの状況だった。いくら双剣を振っても、ゾンビを切っている様だった。

(なんて……、なんて無駄なの!?)

次第に頭がムシヤクシヤし始めた。おそらく、あの狭間の先にはこの異変の元凶がい

る。その前に壁がある。しかし、その壁に到達するのが近くて遠いのだ。

そのうち、私の方が劣勢になっていく。気づくと、もう既に全身傷だらけだった。

「どうかね？これが数の暴力だよ。戦争においては物量がモノを言う……。『数』を制した者が真の勝者なのだよ。」

邪鬼は悠々としている。そして、

「速攻で決めるよ。」

とニヤけ、

「隠蔽は最高の宣伝」

を発動させる。

(何の事実を隠すつもりなの……?)

と内心思ったが、彼女が隠したのは、「自己に潜む『恐怖心』」だった。発動した途端、攻撃され物怖じした妖精の恐怖心を取り除かれ、切り裂いても突っ込んできた。もう玉砕だけでは説明できない。むしろ、

(心まで矯正されてる……。)

このままでは埒がない。そこで、あの時に貰ったあのスペカを繰り出すことにした。そのスペカは、片腕をギリシア神話に描かれるような神が守っているようだった。この絵柄から私が名付けたスペカネームは、

「巨腕『十二柱の巨人』」

である。すると、双剣がみるみる解け、魔法陣にしまわれていく。片方の魔法陣は、次第に右側の魔法陣へと融合した。そのまま二倍にしたくらいの大きさだ。そこから鎖で作られた巨大な右手が飛び出す。私の腕よりも幾分大きい、屈強なものだ。拳を握ってみた。すると、鎖も拳を握ってくれる。

(いや……むしろこんな事している暇はない！)

と、私は鎖の拳を束になっている妖精の方へ飛ばした。飛ばす際、私が反動を受けたが、その腕は弾幕を食らっても壊れる事はない。そして、腕は十数体の妖精をまとめて殴り飛ばす事ができた。

……汎用性が高い、とは言ったが、それでもせいぜい武器が作れる程度だと思っていた。しかし、この鎖は、「武器」でもあるが、「紐」でもある。そしてこの瞬間、私の「手」と化したのだ！

しかし、やはり片手では足りない。そう思った私は、「懺悔の鎖」を使つて魔法陣を二倍にし、左腕を生成した。これで、十分に拳を飛ばせるようになる。

さっきの双剣と違い、こちらは纏めて攻撃できるため、集団戦に向いている。リロード時間がかかるのが欠点だが、それでも強力なメインウエポンになり得る力だ。

小妖精たちをゴスゴスと殴り飛ばす。一撃は強力で、たちまち抵抗する者も減つてき

た。その様子を見た邪鬼は、

「……………くっ！」

と、少し焦る。だが、その後に彼女はニヤリとした。

(これも想定内というの……………!?)

と、内心驚いていると、2枚目のスペカを繰り出す。

「本土決戦『一億総戦力』」

すると、一人小妖精が私に向かって飛びかかった。攻撃する素振りを感じられない。しかし、私に抱きついた瞬間、白く光る。そもそも名前の時点で嫌な予感がし、私をはたき落としてその場をいったん離れた。すると、の妖精は爆発しながら乙つたのだ。もう私が言った“玉砕”ではない。敗色が濃厚なのか、もう既に覚悟している。そして私を巻き込もうとする。これを体感すると、私は段々と酷な気持ちになっていった。

(小妖精はしょうがないと割り切っていたけど、これでは……………!)

どうにかして、あの邪鬼だけ倒さねば。そして私は一つの妙案を思いついた。これは鎖の腕の耐久によるので、リスクがあるが。

迷う時間なんてなかった。私は両腕を引き戻し、片腕を自分全体に巻きつける。だいたい三層分くらいだ。その腕の“鎧”に、妖精達が飛びついていく。彼女たちは、私に光を飾り、ついに自爆した。その様子を見て、邪鬼は勝利を確信する。

「ハハッ！我々の勝利だ！唯一神様は私たちに味方しておられるのだよ！」

そう言うと、妖精達が賑わい始める。続けて、邪鬼は何かを言おうとした。だが、彼女は気付いた。

「何だ、このつぶ……。」

気付いた頃には遅かった。私の鎖の拳が彼女の頬を殴りぬける。そして、そのまま巨大な鳥居に全身を強打した。

（かなり迂回したけど……。）

どうやら、鎖は感覚でも動かせるらしい。結構難しいが、攻守で使えるのだから、十分良い。

全員の煽動が解けたのか、辺りは静まり返る。私は巻いた鎖を解き、状況を確認した。邪鬼はその場から動きもしない。そして意気消沈した残りの妖精たちが、山積みとなっている。

鎖の腕の指先を動かし、確認してみた。あれほどの爆発を受けても、鎖には何一つ傷が付いていなかった。私はため息をつく。

「勸善懲悪とは何なのかしら……？」

いくら死なない（＝存在が消滅しない）とは言えど、殺したような感覚が腕に残る。ここまで無実の妖怪を殺めてしまうと、後に残るのは罪悪感だけだ。

「『不倒無殺』ね……。」

ふと、思つた言葉だ。無論、この能力の自制でもあるが、「当たり障りのない生活を送りたい」という、私の性格にも合致していた。どう解放するか？はたもや、どう現在の生活を維持していいだろうか？

これは、一種の決意表明である。あの狭間の先に、『唯一神』がいる。どうやって展開しようか？ただし、目的は対象の消滅ではなく、対象の戦意喪失だ。

*

狭間に入る。中は禍々しく、空間が歪んでいて気味が悪い。

(狭間だからか、中は案外広いのね……。)

地面はなく、私は飛行している。下を見ると、底なしの谷を見ているようで、恐怖を唆られる。

しばらく進むと、禍々しい空間の中から、色彩豊かな空間が見えてきた。近付くと、既視感がある光景が広がっていた。

(あれは……博麗神社?)

空は明るかった。が、私に移った景色は地獄だった。

根元から壊れている質素な鳥居。そして、えぐり取られたような本殿。周りの木々は所々倒れており、私を知る、ボロくさく、自然豊かな博麗神社の姿ではなかった。

その真ん中で、2人が話している。1人は浮遊し、1人は倒れ込んで。

(もう黒幕は倒せたって訳?ならもう戻ろうかしら?)

戻ろうとした瞬間、小声が聞こえた。

「おや、もう終わりですか?」

その声は私の知る、あの巫女の声でもない。

(まさか……!?)

近くの木々に隠れて様子を見る。すると、巫女がボロボロに倒れていた。敗北したのは彼女の方だったのだ。そして相手方……獏は彼女を見下し、奇妙にニヤけていた。

後編

#8

「……………?!?」

私はこの状況に目を開けた。あの……あの、負けたというのを聞いたことがない博麗の巫女が、私より下の妖怪にボロボロにやられていているのを。

(自分の能力が使いこなせなかったか、それとも……………。)

あの獺の能力が、恐ろしく強大だというのか。

彼女らの話が聞こえてきた。

「あれ、もう終わりです？ 呆気ない終わり方で、私としては少し不満を感じますが。」

巫女は、答える余裕がない様子だった。一体何が起こったのか、展開が急で理解が追いつかない。かと言って、無闇に出しゃばる事もできない。ただただ、この話を聞く事しかできなかった。

「あなた……………、その能力で、何をしたいの……………?」

彼女が気力を持って出して出した言葉だ。これに、妖怪は丁寧に答える。

「第一に、幻想郷全体の支配。第二に、あなたを一度倒してみたかったという興味です

ね。この能力は、私にとって最強の巡り合わせ、つまり、相性が良過ぎるのですよ。こうなつて、ふと思つてしまつたんです。幻想郷最強……もとい、『無双』したいつて。」

と、巫女が問うと、

「あ、それも面白いですね。『無双』と、『ムソウ』。……なんだー、まだ洒落考える余裕あるじゃないですかー。」

と、微笑した。彼女が言った「ムソウ」という言葉には、どんな漢字を当てはめれば良いのか、全く見当がつかない。実際、これが彼女の能力に関するキーワードになるかもしれないが……。

「やして……。」

と、猥が表情を変えた。

「あなたには、これから乙ビチュつて貰います。スペルカードルールの掟ですからね。不満は無いですよね？何せ、あなた達が作ったルールなんですから。」

巫女は、あの会合の時と同じように震えていた。抑える所作もしない。当然、これに猥も気付く。

「おや、随分と自尊心が高いようで。なら、もう一回戦や闘りますか？そんな体力じゃ、やった所で勝機なんて無いですけどね。」

と、彼女はまた微笑した。

巫女の震えが……止まった。

(まさか、覚悟しているんじゃない？)

私の問題は、生死の事では無い。別にこのルール下では、全員死ぬことがまず無いのだから。むしろ、今後の上下関係がひっくり返る事となる。この幻想郷は、おそらく頂点が人間でないといけない。それ故、人里が存続しているのである。それが妖怪になつたら……！長らくこのルールによつて齎されてきた平和が、一気に崩壊する。正直、誰が敵になるかどうかは分からないが、始めに謀反を起こしそうなのは、あの吸血鬼姉妹であろうと、私は推測する。「再び、妖怪の地位を築こう」とか言つて(無論、私はそれに賛同しないが)。

「さあ、ご覧下さい！これが、幻想郷最強と言われた巫女さんの敗北する瞬間です！と言つても、観客は誰もいないんですけどねー。」

猥は、仕上げに入る。

(ここで、あの妖怪を喪失とせば、妹は助かる……、けど……！)

と、内心では思っているのだが、踏み出す勇気がない。もしこのままだったら？仮に負けたら？……最悪なパターンはどちらか、見当がつかない。

(でも、このままでは……。)

獾は、どこからやろうかと地点を探している。

「うーん、ここですかねえ。では。」

彼女は構え始めた。巫女も顔を強張る。しかし、顔とは裏腹に何か別の感情が見え隠れする。これは、眼が閉じていても読み取れるような、簡単な“声”だった。多少の誤差はあるであろうが、こうだ。

(嫌……、あなたのその行動は、誤りよーやめないと、あなたが……！)

命乞いする声が、聴こえる……。これは、決して愚行とは思えない。おそらく、あの妖怪に対する警鐘でもあろう。さっき言ったような事態が、起こりかねないのだから。

(ここには、あの二人と私だけ……。でもどうしたら?)

と、脳内では考えていた。しかし、体は、自然と巫女を守るような所作をとっていた。茂みから飛び出した上に、スペカを発動させ、巨大な右腕を出現させる。その右腕で、あの妖怪の顔を不意打ちで殴り飛ばした。

「ゴフツ……おや、あなたは誰でしょう?」

どこか分からない所から飛び出たのだから、獾は、私のことを不思議で仕方ない様子だった。

私は巫女にサインを送った。

(退け……退け……。)

それに彼女も応じる。猯はそうはさせまいと、とどめを刺しにかかる。私は空かさず左手に剣を召喚し、逆手で左腕を切る。切創に白魔力が染み渡ったのか、猯は動きを止め、右手から能力で空間から“何か”を作り出し、私に襲いかかる。私は左腕に変換させ、引き戻した右腕と共に、その攻撃を防ぐ。ここまでで十数秒。

(この妖怪……弾幕を使つてこない！)

弾幕を使用しないのは私だけだと思つていたが、もう一人いたとは思わなかった。そして、弾幕を使用しないものは、

(能力が強力という事ね……。)

実例が少ないが、ほぼこの法則性があるのは間違いないと確信した。

さつき“何か”とは言つたが、その“何か”とは何なのか？空間を歪ませたのか、単に空気を固めたものなのか、理解できない。

「あなたが、皆が言つていた『唯一神』……？」

私が問うと、

「いかにも。」

と返つてきた。私は顔をしかめた。

「……信じてないようですね。なら、私の本領を少しばかり出してみますか。」

そう言うと、彼女は両腕を広げた。すると、景色がガラスのように割れて崩れてきた。

新たにできた景色は、本来いる所であろう守矢神社の境内だった。

(…………いや！)

私は気づいた。ここは、狭間の中のような仮想空間ではない。現実だ。テレポートではない、何らかの手段で現実の世界に戻ってきた。

「獺」…………それは夢を食う妖怪。夢を司る妖怪。しかし、彼女はそれを超えた。

「…………その顔は、私の能力が分かったようで？」

誰もが、「この夢が本当だったなら」と思ったことがあるだろう。それを彼女は叶えてくれる。

(正夢の「体言化」…………?)

希望・欲望…………彼女なら、何でもできる。これは、単に夢を「想って」いるのではない。夢を現実に「創って」いる。

(「夢創」は「無双」、ね…………。)

*

私は双剣を持ち、さらにLv. 2になっていた「懺悔の鎖」を使用し魔法陣を6個に増やした。空きは4つだ。

「面白いですね、そのカード。そして鎖の動きが気持ち悪くて素晴らしいッ！」

獺はそうニヤけると、夢創した双剣を手取る。これもまた、空間を歪めたのか、空

気を固めたのか分からない物だ。

彼女は私に剣を振りかざして襲ってきた。私はそれに応える。最初、この“何か”で攻撃を受けた時、腕で防いでいたため、感触が分からなかった。しかし、剣で受け止めて分かった。これは、生半可な武器で立ち向かっても無駄だ。

限りなく開いた彼女の目は、瞳孔が縮んでおり、底の光は失っていた。狂気の沙汰である。おそらく、「この戦闘に勝てば、私は真の支配者になれる！」……そう思っているのだろう。

それに伴うものなのか、剣術も徐々に強みを増してきた。鎖を巻いて抑えようにも、夢創の力で碎け散ってしまう。不意を突かれたのか、塊の形を変え、私の胸に正拳突きのおく塊を突きつけた。

「うぐッ！」

加えて後方に思いつきり飛ばされてしまった。

「ハア……、ハア……。」

まともに喋る事もできない。

「うん……、さつきよりは手応えあるな……。」

猿はこう呟く。

(普通なら失神ものよ、これ。)

ただただ正拳突きを食らっただけなのに、口内は逆流した血で覆われ、つい吐き出した。私はそれを袖で拭う。……這うのがやつとだった。

獺が近寄ってくる。何をやるのだろうか？

(……いや、これは逆にチャンスなのかもしれない！)

多分、彼女は直々にとどめを刺すのであろう。あるいは、何か心残りでもあるのか。まあ、そこら辺の事はどうでもよくて、確実に私のことを触れる、その距離まで近づいてくるのが幸運だった。

残り4メートル。この所で私は足につけた鎖をレールの如く操り、彼女に向けて蹴りを入れた。だが、それを見事にかわす。

「ああ、なんと愚かな！ そのまま乙れば良かったものを！」

そう嘲笑って彼女は、私の方向に振り向く。しかし私の二手は、もう既に打つてあった。

鎖での移動は、攻撃の意も含んでいたが、あくまでも過程でしかない。私は勢い余ってしまったって逆さになっている状態であの倭人……いや、布都との戦闘の如く、剣を思いつきり投げる。

「だから愚かな行為はやめろと……！」

さらに嘆いて、それをまた“何か”で防ぐ。それでも、私は再び溜まった口内の血を一

回吐き、彼女に問いかける。

「…………さて、『愚か者』はどっちでしょうか？」

「何を…………？」と彼女が言った頃には、既に側面からもう一つの剣が、彼女の右腕を直撃していた。簡単に言えば、剣と魔法陣を繋ぐ鎖をカウボーイの捕縛縄の要領で振り投げた、という所か。

「…………よく当たりましたねえ。」

獺は痛みには耐えながらも、平然を保っている。しかし、心中は底から怒っているであろう。「人間に負けた妖怪が…………！」そんな風に思つて。

その怒りの現れなのか、満を持して初めてのスペルカードを発動させる。

「夢創『幻魔の碎動』」

すると、境内全体で爆発が始まる。だが…………、

(どう見ても爆発が上がっていない。なら、爆発じゃないって事…………?)

確かに、各々の箇所で銃声が轟いている。それでも妙にこれが「爆弾が炸裂する音」とはかけ離れている気がしてならないのだ。

仮に爆発として、これが無差別のため、思うように近寄れない。そこで、今度は両腕を作成して獺を殴りにかかる。爆音が大きいだけで、威力はそんなでもなさそう…………、という推測の上での行動だ。

一方の相手側も、スペルカードのみで私に対応するわけにはいかなかった。彼女も私と同じく拳で殴りかかる。素手で、だ。

しかし、殴り合いは互角だった。

(やはり……ね。)

薄々感づいていたが、素手"だけ"で鎖の拳を受け止めたのではなく、素手と鎖の隙間に"何か"を作り、緩衝させた。おそらく、メリケンサックの意も含まれていたのだろう。……これで分かった事。それは、"何か"が空気の塊であるという事。空気を塊に夢創した、という事だ。

気付かぬうちに、鎖の手前で、今まさに碎動が起きようとしていた。

(まずい、これでは巻き込まれてしまう……!)

慌てて引き抜こうとするが、その碎動は、私の鎖を抜かせてくれない。むしろ、吸い込まれていく。同時に、鎖はメキメキと碎かれる。ついにそれを吸い切れなくなった時、今度は逆流を起こし、吸引エネルギーが全て吐き出された。それにより、私も吹き飛ばされる。明らかに作れる物ではないはずだが……。

(……いや!)

直後に思った。

(彼女は虚構を現実化する能力。こんな事をするのも容易いはず……!)

なら、どんな原理なのか？私はわざとそれに近付き、確認しようとしてみた。猯は不思議がる。そりや、自分から相手の攻撃に突っ込むのだから、当然の反応だが。

私の少し先に、碎動の予兆が現れた。私は更に近付き、それを確認する。そして、その原理が現実とかけ離れていることが分かった。

（空間を……歪ませてる!?!）

空間を弄るのは相当なエネルギーが必要だ。通常じゃありえない。しかし、今は正夢の空間。流石に、もう私も驚かなくなつた。

（吹き飛ばすエネルギーが大きいのも、それが理由ねえ……。）

さつき発生したエネルギーで、私はまた吹っ飛ばされる。一撃で、確実に当たる攻撃……。考えられたスペカは、一つしかなかつた。

個人的に、最後まで温存しておきたかつたが、あの時にできた、銃が描かれてい
るスペカを発動させる。

「超音速強化単銃『オートマグ44ーj』」

そう私は名付けた。発動すると、魔法陣が右人差し指に6つ全て重なり合う。私は右手を銃の形にし、左手を添え、猯に構えた。

そのまま私は移動し始める。歯ぎしりを起こしているが、右手は異常に緊張せず、静かに銃口を向いていた。

彼女は彼女で、直撃しないように空気壁を作っていた。双剣でもつても攻略できない、空気塊だ。

鎖を撃った。「なんて無駄な事を。トチ狂ったのか、あなたは。……こんな事を考えているのであろう。確かに、私もこの鎖が空気壁を貫通するとは思えない。が、これは賭けだ。これが貫通できなければ、戦闘には負ける。

これらの事を、実は早口で思っていた。この賭けが、刹那のごとく終わったのだ。……つまりは、弾速が凄まじく速かった。鎖は、乱発する碎動の隙間を通り抜け、彼女の手前まで来ていた。その勢いのまま、空気壁と対峙するのだが、数秒競り合っただけで、貫通した。鎖は猿の左肩を貫く。油断していたのか、彼女は大きく目を開く。

(幻魔の碎動……、攻略ね。)

肩を貫通しているにも関わらず、猿は不気味に笑う。

「ヒヒッ……、ヒヒッ……。」

笑いながらも、彼女は鎖を引く抜き、砕く。あまりに奇妙で、何も言えない。

「勝ち誇った気？笑えるねえ。何も、チヨイと本気を出しただけで、まだ氷山の一角というのを抑えたい欲しいなあ。」

と言うと、

「全能『天上天下』」

を発動させる。すると、天上から雨が降ってきた。次第に雨量が増え、雷鳴があちこちで聞こえてくる。さっきまで晴れていたのだから、きつと夢創で天気を弄つたのであろう。

さらに地上を見ると、さっきまではなかった亀裂がある。建物を見てみると、大きく揺れ、崩れ落ちる。……浮遊しておいて良かった。

「能力を知っているだろうから話すけど、私は現象、概念その他諸々を操れる。もちろん、この天気も。まあ、人一人殺したり、能力を変えるのは相当の気力が必要だから、今の私じゃできないけどね。」

この雨量でも声はつきり聞こえるのも、まあ、多分自分の声を夢創したのが理由であろう。

私が、移動しても移動しても雨は相変わらず強く降りしきっていた。雲ごと移動している。そして、私の所だけ雨が降っている。

私は、元の位置に戻った魔法陣のうち、二つを空高く飛ばし、止めた。さらに、残りの4個を集結させ、再び銃を作り出した。どうせ猿のことだし、私の事を透視で見ているはずだ。もうあの手は通用しない。

すると、彼女は手を下から振り上げる動作をした。その後、大きい竜巻が発生する。竜巻は私の方に飛んできた。これを辛うじて避ける。

雨が止んだ。しかし、今度は下から水蒸気が立ち込める。見ると、本来ないはずの噴火口が現れており、赤くマグマが煮えたぎっていた。

(……まさか！)

私はその火口を避けた。直後、大きく噴火した。勢いは凄まじく、吹っ飛ばされる。上からは噴石が襲来し、対応できない。仕方なく、間近に来て危なかった大岩一つだけ、銃弾を飛ばして回避した。

雷鳴は相変わらずだ。私は再び銃を構える。

「現実は無情なものだよ。思った通りに事が進まないからね。」

猯は苦笑する。しかし、私はこれを好機と捉えた。

「それはどうかしら？」

私は銃を崩し、両腕を作り出す。さらに、飛ばしていた二本の鎖を双剣に変え、巨大な鎖の手にそれぞれ装備させる。

「私は、剣も腕も遠くに飛ばせるのよ！」

と、私は猯に時間差で両腕を飛ばした。それを彼女は、さつきと同じく空気壁を作つて守ろうとする。しかし、それが私の目的ではなかった。

最初、右腕が彼女に近づくと共に、持っていた離す。その後、左腕の剣も離す。

その両腕は、空気壁を作った彼女を、さらに守るように巨大な手で取り囲んだ。直後、中

から悲鳴が聞こえる。

推測の上だったが、どうやらこの鎖は金属製だったようだ。避雷針にして正解だった。さらに、数億ボルトの落雷数発分を相手に与えたのだから、相手のスペカに救われた。

*

電気が全て飛んだのか、鎖には電流が流れていない。囲いを外すと、やはり猯は間に空気を敷き詰めていた。やる事が、そこらの妖怪とは違う。

「私のスペカを逆に利用されたとは……、流石ねえ。」

猯は私を称賛する。

「だけど……、だけど！もう既に3枚目のカードは発動されているのよ!!」

そう言うと、彼女は私の視界から消えた。

(一体どこに……?)

「……あなたは、私を認識できない。」

真後ろから声が聞こえた。空かさず後ろを振り向く。やはり、彼女はいない。

「おいおい、二度忠告させるのはやめてよお。」

また真後ろだ。私は素早く剣をまた作り、後ろに振り回す。だが、そこに姿はない。

「まだ分からないかい？私が常に死角にいる理由。ちなみに、この謎を霊夢さんはすぐ

解明したね。……もつとも、戦績が多いのが大きいけど。」

あの巫女と、過去に戦闘した事がある人妖。……心当たりが多すぎて、まともに絞る事ができない。狙っているかは分からないが、ヒントにならない。

(どうやら、明かす気はなさそうね……。)

やれやれ、と思いつながら、私はその場を動かさないことにした。要は、サイレント防衛宣言。無理に襲った所で意味はないし、むしろ相手の術中にはまってしまう。彼女の言葉から察するに、巫女は早期にこの仕組みを知り、攻略できた。しかし、それはハングアであったから。無知の私には、当然何が起きているのか見当がつかない。「無闇に移動しない」というのも、この状況では得策だったりする。

原理もよく分からない瞬間移動を繰り返しながら、彼女は私に対して手刀で攻撃してくる。動かぬ私は、防戦する一方だ。

次に瞬間移動されると、彼女はいなくなっていた。

(まずい、一旦消えると次にどこから出没するか分からなくなる……！)

辺りを見渡す。しかし、見えるのは自然と、無残に破壊された建物だけだ。

(こんな攻勢なのに、逃げたってわけでもなさそうだし……。)

私は瞬きをした。その一瞬だった。目を開いて入ってきた光景は、針地獄。数メートル先から複数のナイフが私に向かってきた。

(剣ではたき落とせば……。距離が距離だし。)

と、身構えたその時、ナイフの速度が急に上がった。

(何も力を加えてないはずなのに……。！)

高速度のナイフに対応できず、私はその殆どをまともに食らってしまった。数メートル距離を置いたのは、私の余裕を呼ぶため。……まんまと掴まされた。

「タネ無しマジック……。なんてね。」

獏は私に示すようにして、一本のナイフを持つ。やはり、顔は不気味な笑みを作っている。

(やつぱり、やっている事が……。もろエンターテイメントねえ……。観客はいないけど。)

私は微笑して頭を抱えた。どうしよう。攻略法が分からない。

「いやいや……。まだ分からないかい？ さっきの攻撃は、結構ヒントだったんだけどな。」

「……。手加減してるつもり？」

私が問いかける。

「ごもつとも。こんなんじや、まだ面白くないからね。」

何だか屈辱感を覚えた気分だ。しかし、今はそれに耐えるしかなかった。

今までは、心読能力によって心理戦では無類の強さを誇った。前にも話した通り、今でも勘は冴えている。が、彼女はそれ以上に天才なのだ。自分の能力を深く知り、それを応用しているのだから。私なんて、まだ完全に使い切れていないと言うのに。

……一つ妙案を思いついた。私は、自分に刺さったナイフを獺に向かつて投げた。当然、ある程度距離があるので、彼女はそれを避けようとする。しかし、それに加えて、ナイフの速度が明らかに遅くなっていたのだ。

（確実に避けようとして、やっと正体を明かしたわね……）

その隙を得て、私は腕を作成し、彼女に拳を飛ばす。彼女の移動速度は、ナイフ投出速度が遅くなる度に遅くなる。要は、この拳は相対的に速くなる。これに対応できずに、彼女はこの痛みをゆっくりと味わう事となった。

意味不明な瞬間移動、物体の急な加減速……。つまるところ、彼女は「時」を夢創していた。そりゃ、一度時止めの能力と戦闘したことのあるのなら、早期に攻略できたのは当然だったな。

獺は、少し愚痴っていた。まあ、「手加減したのに、こんなに殴ることもないだろう。」と思っているのだろうか？そんな彼女には、「自ずから時を減速したのがいけないのだ。」という感情論をお送りしたい所だ。

どうやら、彼女は心が落ち着いたようで、

「夢創『ファイフス・デイメンション』」

を発動させる。ここから推測するに、さっきの時空干渉スペカは、「夢創『フォー・デイメンション』」で、あながち間違っただけではないであろう。

「私は……、既に5次元にいる！」

僕はそう言って、二つの物体を作り出す。その形は、まるでゾンビのようだ。

また時加速が始まり、ゾンビは生物と言っても差し支えないような動きとなった。物体しか作れない彼女が、擬似人類を生成したのだ。

（白属性がゾンビに効くからいいもの……！）

問題は、別にあつた。生成中、時加速を行なっていたため、数は尋常ではないくらいに膨れ上がり、いくつか中隊が構成できる規模となった。さらに、意思があるかのように統制が取れており、無駄がない。

「さあ、この軍隊に勝てるかな？……とりあえず、“多勢に無勢”の集団ではないという事を言っておくよ。」

そう私に忠告して、彼女は前進の合図を送った。それと同時に、ゾンビらが威勢良く私に突撃してくる。

私は双剣に切り替え、襲ってくるゾンビ達を斬りつける。ゾンビは切創の白魔力により、たちまち消えていく。しかし、それ以上に襲ってくる方が多かった。ゾンビの

人(?)盛りで、本人が見えないが、おそらく、今も生成し続けている。この速度に圧倒されて、あの巫女は負けた。確証がある。物体を反射するだけじゃ、これには勝てないのだから。

一瞬、ゾンビ達の隙間から、獺の服装が見えた。そこへ突っ切っていくと、確かに人が入れる一定の隙間はあったが、彼女はいなかった。

(時止めを使って逃げられた……いや!)

後ろの気配に気づいた。空かさず、剣を後ろに振る。……果たしてそこにいた。

「おやおや、ご名答。」

獺は空気を固めて、私の攻撃を受け止めた。私は微笑する。

「流石に、すぐ逃げるような、野暮な妖怪ではないというのは、この戦闘で十分知れたわ。むしろ、自分自身でもう既に分かっているはずだろうに。」

「お褒めの言葉かい? ありがたいね。」

別に褒めてはない。が、煽ってきたのは確かだ。気を揺さぶった所で意味はないというのに。

また時止めを使い、消えた。

(今度はどこから……。)

私は、再度鎖を靴に取り付け、レール走行の如く急上昇した。この鎖の利点。そ

れは、時にギリギリ干渉し、時加速下でも通常の数で鎖を飛ばせる事だ。それ故、動きがやや俊敏なゾンビ達に邪魔されずに済む。

追手のゾンビを、逃げつつも確実に数を減らしていく。残り100体前後になった所で、残りの鎖を使い、さっきの捕縛縄の要領で、猥の四肢を掴もうとした。当然、彼女は時止めを使い、逃げる。が、私は行動パターンを見抜いていた。それは、上から見て、初めて分かった。

実は、(意図が全く分からないが)ゾンビの塊の中に空間が5つあった。いわゆる、安全地帯だ。猥は、この5つの中でしか、時止めによる瞬間移動をしていない。これが分かれば、あとはモグラ叩きでしかない。

「……………ひ、卑怯な気がするの私だけ?」

急に、猥がビビり始める。

「そうねえ……………でも、あなたはこれに対処できるのでしょ?夢を現実化できるのだから。」

逆に煽ってみる。因果応報とはこの事だ。躍起になってまた襲ってくると思っただが……………。

「……………くッ!」

猥は指を鳴らした。すると、ゾンビは消え、加速していた時も通常の数となった。

スペカの効力を消したのだ。安心してしまったのか、私は一回、血を吐いてしまった。(あなたの有頂天も、もう終わりよ……。)

*

私は、勝利を確信していた。自尊心も相当傷ついたので、もう襲ってこない、そう思っていた。しかし……、

「……ハハッ。」

ポケットから紙を一枚取った。

(この猥……、まだ何か持っている！)

その紙を横に振って、猥はスペルカード宣言をする。

「エターナル・ドリーム」

(まずい……、あれは……。)

スペルカードを専門に研究してきたから分かる。あれは、ラストスペルだ。しかも、終わりが無いラストスペル。自尊心がなくなつた今、彼女は逆に“無敵”だ。勝ち負けだの、立場だのはどうでもいい所まで来ている。ただ、目の前の敵私を倒せればいい、それだけを考えて。

「私への攻撃は、全て効かない！よって、私の攻撃は永遠！あなたは何度も“夢落ち”するのよ！」

「夢落ち」……う？ どういう事よ？」

問いかけても答えてくれない。もはや、何も見えていないのだろう。それは、妖しく光る目、大きく吊り上がった口から見て明らかだった。

……このままだと、無差別に人妖を襲いかねない。ここで喪失^や失らねば。

私は、獺の先にあつた幹だけが残つた巨木2本に、それぞれ一本ずつ鎖を刺し、一気に移動しながら襲つた。だが、獺はそこから逃げなかつた。

(これなら……！)

勝ちも確定した、そう思つたのも束の間だった。

双剣は、確かに彼女を斬つた。両肩をだ。しかし、直後瞬きをすると、逆に彼女に襲われていた。しかも、私と同じく両肩を狙つて。

訳が分からなかつた。ならば、と今度はその攻撃を防ごうと試みた。だが、これも瞬きをした後には無かつた事にされていた。結果、この攻撃を食らつてしまう。

(あんな瞬間で攻守が変わるわけはないはず……。たとえば、夢創でそれが配置を弄れようとも。)

内心焦つていた。彼女の、私が狙つた箇所を見た。……剣が触れ、かつ裂いた実感はあつた。だが、そこに患部はなく、服すら裂けていなかった。

(立場が……替わっている?)

自分でも、ここまで驚異的な理解力があるとは思わなかった。能力を使っているのは、私が瞬きをしている間だけ。実際は、単に立場が入れ替わっているのではなく、加えて私の認識、感触、等が猫と共有され、変わっているのであろう。簡単に言えば、私が攻撃したという「事実」を攻撃される「事実」に捻じ曲げられた、という所か。

鍵は1つ。能力行使者である彼女に、如何にして認識されないようにするか、だ。となると、話は早かった。何せ、この状況にぴったりなスペカがあるのだから。

それはオートマグであった。すぐに、私はそれを発動し、6つ全ての魔法陣を重ね、すぐに狙いを定め、撃つ。銃弾は、再び肩に命中した。

(やったか……！)

しかし、瞬きをすると、逆に私の肩に空気弾が貫かれていた。どうやら、既に認識されていたようだ。まだ速さが足りない。

これ以上速さを大きくするには、どうすれば良いのか？鎖をより速く飛ばすには、魔法陣の重ねがけがさらに必要となる。……脳裏に、ある一枚が過ぎった。

(……懺悔の鎖)

まだ、懺悔の鎖はL.V. 2までしか解禁されていない。しかし、これを初めて使った時、ふと変な事を思ってしまった。L.V. 2では、キリが悪く、もう一段階あるのではないかと。

その予想は的確だった。右端に、本来書かれているはずの『L v. 2』という文字が、『L v. 3』に変わっていた。この瞬間、私は初めてこの能力の成長を自覚した。おそらく、最初で最後の経験であろう。

(フフツ、遅すぎる青春ねえ……。)

運命は、何故私を再び舞台上に連れ戻したのか？ 私に、成長の可能性を信じさせるため？ あるいは、強力な能力を持てる素質があつたため？ 問いが見えない問い……。もと、「Eternal Question」が、私の頭に種を蒔いていった。しかし、その答えは、いたって単純だった。

(なるほど……。 答えなんて、最初からなかったのねえ……。)

ただただ、この異変・怪異というイベントを「楽しめ」という事だったのではないかと。実際に、久し振りに地上の多くの箇所を飛び回つたし、色々な妖怪とも戦闘つた。この問いに、初めから答えなんてなかったのだ。

そして、この「鎖符『懺悔の鎖』L v. 3』」は、運命がくれた最後のプレゼント。そして、この異変という名の「クエスト」をクリアするための「必須アイテム」。要は、これを使う事で、この異変、そして、妹も助かるという事だ。

(さて、この夢から覚める時が来たようねえ……。)

私一人で、夢界から現実に戻す作業が、始まる。この異変の思い出が、走馬

灯の如く流れていく。その走馬灯を感じながら、スペカを発動させる。

「鎖符『懺悔の鎖』Lv. 3」

ついに、魔法陣が合計10個となった。

三度、魔法陣を重ね、構える。当然、獺はこれを認識しているため、このまま撃つと、私はまた空気弾で貫かれてしまう。

そこで、私は1つ確認をした。あえて彼女の側を横切り、後ろ蹴りを食らわす。瞬きをする、やはり立場は入れ替わり、私の脛に蹴りが当たる。しかし、私の手は相変わらず銃を構えたままだった。その行為が「危険」と判断されなかったのだ。

(どうやら、確実に攻撃が来るものだけを選んでるようねえ……。)

銃形を維持しながら、一旦構えるのをやめる。そして、そのまま上に飛行し始めた。認識できなくなると考えたのか、獺は私を追いかけてくる。

いわし雲ができる高度くらいだったであろうか、今度はあつちから攻撃を仕掛けてくる。彼女は、空気を固め、さっきの弾丸の如く飛ばす。これを私はわざと当たる。どちらにしろ、私がその「攻撃に当たる」という真実は変わらないのだから。

弾丸は腰から背中にかけてえぐるように通過した。それを動機に、今度は飛ぶのをやめ、重力に任せて一直線に落下していく。

(まずい……！)

そう思ったのだろうか、慌てて獺も方向を変える。目の開き具合が、それを教えてくれる。

私は、銃を構え直す。距離は5メートルを保ったままだ。

「さあ、夢から覚める時間よ……。」

私がそう呟くと同時に、鎖の銃弾は放たれる。

人間、及び人間の思考のできる異種が、物体を視認するまでは、0.3秒かかる。対してこの銃弾は、音を置き去りにし、『超音速』という名にふさわしいマッハ1.3の速度で飛ばした。約450メートル毎秒と言うべきか。距離は5メートル。よつて、獺に弾丸が到達する時間は、0.01秒。

結果は、明確だった。

彼女は、被弾後に来た衝撃波で、再び上に飛ばされてしまう。一方で、私は地面に打ち付けられる。

(まあ、こうなるのは分かっていたけど、中々痛いものねえ……。)

瞬きをしても、結果は変わらない。

……私は、打ち付けられた地面の上で寝転がった。今になって、体全体の傷口が痛み始める。どうやら、限界突破でもしていたらしい。

唯一神は消えた。真意は違うだろうが、ゲーテの言った通りだ。

*

獾が落ちてきた。私は、ボロボロの体を奮い立て、彼女に近寄る。

「まだ私に戦闘る気があったなら……、その隙を狙って乙りに来るかもよ？」

「それは冗談かしら？ 1つ言えることは……、まだ、それを言える気力はある、という事ね。」

私は、巫女対して獾が言った言葉を借りて話す。これに彼女は声を霞めて笑った。

「ところで……、どうするんだい？ 私の身体は。礼式的に、乙らせてもいいんだぞ？」

彼女が提案する。

「んじゃ、お構いなく。」

私は剣を生成し、獾の胸を素早く切り裂く。すると、彼女の身体は、みるみる回復していき、傷1つなくなる。

「……何の真似？ 敵を全開にさせるなんて。逆に乙られて欲しいの？」

この質問に、私は何かを想うように答える。

「それは……、あなたはもう敵ではないから。もう、あなたの心には戦闘意思なんて全くない。これは、私が心を読めなくても分かることよ。」

「……大した妖怪ねえ。」

彼女は、どこかで私の事を尊敬したらしい。……そもそも、この会話中の脅迫も、自

分の真の心から吐いたものではないのは知っていた。言わずもがな、私は覺り妖怪だもの。

急に、獺が、

「……なら、あなたには私から何か差し上げます。さあ、何が欲しいですか？」

と、讓歩を持ちかけた。当然、私はこう答える。

「そうねえ……。やつぱり、能力を元に戻して欲しい、かな。」

「……え、良いのかい？ そんな強力な能力を持ったのに、それを手放して。」

彼女は少し動揺した。

「……良いのよ。私なんて、異変を解決するなんて事は不向きだし。今は妹の能力が戻って欲しい、ただそれだけよ。」

あまりにあっさりした理由で、さらに動揺したが、すぐに立て直した。

「……分かりました。では。」

と、獺は1枚の紙を夢創する。それは、明らかにスペルカードだった。

「このカード1枚で、この異変は終わる。……にしても、本当に良いのですか？」

「……悔いなんてないわ。」

だって、初めて自分の手で異変を解決したのだから。これ以上の青春はない。

やれやれ、と言いながら獺はスペカを発動させる。

「幻『夢創崩壊』」

その発動を見届けて、私は守矢から飛び去った。直後、爆音が響き、胸が痛むような衝撃波が発生した。

(多分、この痛みを受けて能力も変わったのねえ……。まあ、それが一回で済んだのだから、運が良かったとも言えるけど。)

後ろを向く。神社は本来の姿を取り戻していた。最後に、夢創能力でも使ったの
だろう。

飛んでいると、人里が現れてくる。すると、脳内に、いつものように声が入ってくる。吐けない暴言、抑えられた恋愛感情、卑猥な妄想……。見ると、私の第三の眼は、再びその眼球を露わにした。うん、いつも通りだ。

やっぱり、地霊殿は遠いと思う。着くのに1日中かかった。入口の、嚴重に施錠された扉を開ける。そこには、血涙を流していたものの、見事に閉じた第三の眼が、靴箱から顔を出していた。一番の笑顔を出してしまったかもしれない。だが……。だが……、間違いなく、それは妹であった。

「おねえちゃーっ!!」

彼女は、靴箱から出てきて、玄関で腕を広げて待った。その胸に、私は飛び込まずにはいられなかった。

「ありがとう！ やつぱり、お姉ちゃんは自慢の姉だよっ！」

その言葉に加え、最高の笑顔にVサイン。……体が足で支えられない。気付くと、私は妹の胸で泣いていた。無論、これは悔しいのが理由ではない。嬉しいのだ。いつもの、明るいこいしに戻ってくれた。鎖の能力なんてどうでも良い。ただ、妹を失うのだけは、絶対に……！

「……おねえちゃん？ どしたの？」

あまりに泣き崩したからか、不思議がって聞いてきた。

「大丈夫よ、こいし……。ただ、あなたさえいれば、私は……。それだけで……。」

俗に、この異変は能力変化異変だの、夢創異変だのと呼ばれるようになった。

*

解決して2、3日が経過した。どうやら、あまりに寝てなかったからなのか、解決日の深夜に就寝すると、つい今日の朝9時まで起きることはなかった。おまけに、ペットたちに、

「さとり様、不在中のお仕事が溜まっておりますよ。」

と、叩き起こされたようなものだから、まだ寝ようとすれば、いくらでも寝れる。

実際、仕事も溜まっていたのだし、そんな事も言ってもらえない。というわけで、現在それに取り掛かっているのだが、ふと、こんな事を思ってしまう。

(あの異変以降、試したことはないけど、鎖の能力って使えるのかしら?)

まあ、異変は解決したのだから、発動しないのが正解であろう。しかし、微かに望みを感じる。

よし、物は試しだ。私は外に出て、最初みたいに、岩盤に飛ばせるか確認してみた。前に飛ばすよう、自己暗示する。……しかし、何も起こらないようだ。私は笑った。「まあ、異変も解決したし、起こるわけないわね。大体、こういうのを考えているって事は未練が……。」

ジャラジャラジャラ……バシユツ。

聞いたことのある、鎖が擦れる音が聞こえた。私は戦慄した。右上を見ると、見たことのある鎖が、見事に岩盤に刺さっている。

(ていう事は……!)

今度は第三の眼を確認する。……眼は、再び閉じていた。何かを察し、さらに怯える。

「なら……、なら、一体この能力は何なのよ……?」

夢が朽ちた先には

10月28日

異変が起こったのは10月の初旬くらいであつただろうか。霊夢を狙い撃ちしたであろうその異変を、私は自身の能力……いや、何者かに囚われた結果使えるようになった能力で解決した。その時の主犯で、私と戦闘もしたドレミーとは、夢界で仲良くさせてもらっている。決して「友達」とは言えない関係だが。

あの異変から変わった事。それは、私がお尋ね者になつてしまつた事。理由はさっぱりだが、こいしによると、そのような噂が絶えないようだ。能力のことであれば、私を除いたほぼ全員が戻つたというのに、何を今更。

その異変は、私のスペルカード研究に大きな影響を与えた。ここ最近、異変時のカードを仲のいい人から入手し、その解読作業に追われていた。そのカードの全解読が終了したのは、つい1、2日前の事である。ノートは3冊にも及び、ノート同士をくっ付けて、ブックカバーを新しくした。名前は、「スペルカード基礎記号全録」。これを他人に悪用されると、異変レベルの騒ぎになつてしまう。なので、この本は、普段人目につかないような、私的な本棚に隠してある。まあ、これで私は、「全てのスペルカードを

作成できる程度の能力」を「習得」した事になる。

さつき囚われた結果使えるようになった能力と言ったが、現在も私は囚われ続けている。未だに第三の目が開かないという外見的特徴がみられるので、これは確実であろう。捕縛者が、外部なのか内部なのかははっきりとしていない。私は、この状況は何か試験を与えているのではないかとつくづく思ってしまう。仮にそうなら、私が解決した異変——俗に言う夢創異変——以上の、もっと規模の大きい事案であるのは間違いない。

スペルカードの代行作成も、無期限休業の状態だ。確かに、全ての基礎記号は揃っている。しかし、自分の心読^元能力を使ってカードを作成していたし、第一、自分の安全が保障されていない環境下でこれをするのは危険だからだ。能力バレだの、お尋ね者として、博麗神社に送致されるのは御免だ。

夢創異変で、全てが変わった。私は、一気に劣勢に立たされた。

*

さて、前述のような危険もある中、私は最近よく人里へ行くようになった。たまに外界の物を売っているからだ。正体が分からない様に、帽子に加え、上着にポンチョの格好をして出かける。……そんな事はどうでもいい。ノートを欲しかった分より、1冊多

く買った。 眩く程度に、日記を作成しようと考えたからだ。 記念すべき1枚目は、”はじめに”程度の内容を書いた。

(買ったはいいいけど、今日は面倒だわ……。 明日……。 いやー1月から書いていこうかしら……)

そう思って、その日は寝てしまった。

11月2日

「地霊殿に本を返して欲しいの。行ってきてくれる？」

友人様が、こんな事を言ってきたので、は地霊殿に向かいました。地霊殿は、どうも地下にあるようで、

(にしても、地霊殿の主ってどんな人なのかねえ?)

とワクワクしていました。

いざ地霊殿に着くと、余りに荘厳な入口が現れました。そこからは、何か心が冷え切るようなオーラが出ています。

(えーつと、図書館……図書館……。)

友人様は、地霊殿の主が普段、図書館にいらつていました。でも、案内図もない、この大きな館。探すには無理がありますよ、友人様……。

やっと見つけた時は、私は、足がやられるほど疲れていました。それでも、まだ回りがきれてない部屋もあるのですから、地下にあるとは言えど、甘く見すぎっていました。

(早く終わらせて帰ろうかな……)

そう思って、気怠げに扉を開けました。すると入った途端、鎖が私めがけて飛んでき

たのです。わざとなのか、鎖は命中しませんでした。一気に疲れを忘れる程、恐怖感を覚えました。ご主人様が、

「あの妖怪、主にしては能力自体が弱いから、その気になれば私一人で倒せるわよん」なんて冗談を言っていました。本気で来られたら喉元に一突きですよ、あの鎖で。（この妖怪にケンカを売ったら……、多分即殺だろうなあ）

私の方に振り向いて放った言葉を、今も覚えています。

「ここに入る時には、『2回ノック』。そう張り紙に書いてありました……よね？」

これが、友人様でさえ一目置く地霊殿の主……いえ、「ぬし様」との出会いでした。私がテーブルの上に本束を置くと、ぬし様が私に話しかけてきました。

「自己紹介が済んでいなかったのでね。私の名前は古明地さと。地霊殿の主を務めています。あなたは？」

「私の名はクラウンピース！」

「フフツ、噂通りの元気な娘」

ぬし様がそう呟くと、すぐ表情を変え、

「……終わつたなら、早く帰つてくれませんか？気が紛れるので」

と、退くように言われました。

「あの、少し休むとかは……？」

「別に静かにしてくれるなら、構いませんが」

しかし、そこまで強制ではなかったようです。

本棚を見渡すと、天井まで、凄まじい量の本が置いてあります。一体どこから集めたのやら。その中から、一冊、気になる本があったので、手に取って読み始めました。確か、天体に関する図鑑だったかな。中々に分厚い本だったので、これで時間を潰せると思いました。

2、3時間経った後でしょうか、急にペンを止めて、

「まだ帰らないのですか？それとも、何か自分に合う本でも見つけたのですか？」

と、問いかけて来ました。

「はいっ！たまたま見つけた図鑑に夢中になってしまつて……、帰つた方が？」

「なるほどね……」

すると、「ぬし様」が、また振り向いてくれました。

「確かに、自分に共通するテーマの本があれば手に取りたくなる、その気持ちはよく分かります」

と、笑つて。その風貌は、どこか、純粹に憤怒した友人様のような……。一目置く理由が分かりました。

読み終わった頃には、短針が5か6を指していたと思います。

「お邪魔になりそうなので、そろそろ帰りますね」

と、私が言うと、主様は、黙って手の甲で軽く手を振りました。そして、気に障らないように扉を丁寧に閉め、図書館を後にしました。

帰っている最中、私は彼女の事が気になつて仕方ありませんでした。ただただ、単純に興味がありました。友人様が、何の意図で私を地霊殿に派遣したのかは、教えてくれませんが、きっと、見聞を広めてきてくれ、という事でしょう。なら、明日も行かなくては。

問題は、ご主人様と友人様が許してくれるかですかね……。

11月5日

……妖精とどう話したら良いのか。気付くと3日が経過していた。来なかった日があつたというのに、その日は研究に没頭してしまった。馬鹿みたいだ。しかし、今日は朝ふと思った事を実践してみようと考えた。それは、敬語で話さず、距離感を縮めてみよう、というものだ。

クラウンピースは、いつもの通り私の部屋の中から、文庫本を取り出して読んでいる。しばらく見ていると私が見ていたのを察した様で、

「どうかしました?」

と、問いかけてきた。

「いや、物思いにふけていただけよ」

つい、私は卒ない回答をしてしまった。その後、私は椅子を戻して、実際にそれを行動に移してしまった。

再び彼女の方に椅子を向ける。どうやら本を読み終えたようで、そこに姿はなかった。しばらくすると、てくてくと走って、元の椅子に座った。さっきより大きい本だ。どれどれ、と眼鏡をかけて確認する。

(七……不思議?)

予想外だった。まさか、彼女がオカルティズムな分野を好むとは。幻想郷七不思議——それは、私が研究目的で入手した古典書だ。70年前に書かれたにも関わらず、筆者がえらく達筆なので、私も読むときには解読に苦労する——今でも、読破できてないくらいに。ましてや、文字慣れしていないであろう彼女にとつては、幾分読みにくい本であらうが……。

やはり、読みにくい本だったらしい。妖精が、首をかしげ始めた。

(しようがない……)

と、ため息をついて彼女に近寄り、椅子背もたれに屈む。そして、読み聞かせるようにこう言った。

『最強スペルカードの存在』……この幻想郷に最も強いスペルカードは、あつてはならない。最強は、二つある。1つは、弾幕の展開における最強で、1つは、召喚における最強……』

開いてあつたページの1、2行分だ。分かりやすいように、読んでいる箇所を指で指す。読み終わると、妖精が私の方へ向き、

「このどこが七不思議なんですか?」

と尋ねてきた。私は、それを簡単に説明する。

「何故か、今の幻想郷には世界一避けるのが難しい、強力なスペルカードが存在しないのよ」

「友人様のスペルカードじゃないんですか？」

「確かあれは……世界4位だったはず」

そのままのノリで口を滑らせてしまった。私しか知らないのだから。

「なんで、そんなに確なんです？」

当然、この事に疑問を呈した彼女は、こう尋ねる。

「……この本に書いてあったのよ」

私は、咄嗟にらしい事を言った。もちろん嘘だが。

「ふーん」

当然、読むのに気が滅入ったのだから、これ以上探求するのも諦めるだろう。

*

「あつ！」

妖精が、大声を出す。

「一体どうしたのよ……」

「さとりさんの能力、もう1回見せてくださいよ！ほら、最初に出会った時の」

一体どこから湧き出たのか分からないくらい、唐突すぎるお願いだった。

「へ？」

私も、驚いて変な反応をしてしまった。今まで（と言っても二か月前後だが）、変化したままの能力という秘密は、外に漏らしたことがなかったというのに……。私を探っているのだな、と疑りの目をかけた。しかし、彼女の目は、ぱちくりと開いて輝いている。……しようがないわね」

こいしとは何か違う、純粋な可愛さがあった。これは折れてもしようがない。

（1回ぐらいなら……）

と、魔法陣を出し、鎖を壁に突き刺す。この初歩的な操作だけで、彼女は感銘する。

「素晴らしい能力ですね!!なんでこれを世のため人のために使わないんです?」

「え、ええ……」

私は、そのまま黙った。下手に口が滑ると、（純粋そうな娘だし）簡単に言いふらしそうだ。かと言って黙ったり、消極的の回答だと、彼女の腑に落ちないだろう。

「ちよつと、聞こえてます?」

私の方に身を乗り出してきた。彼女の目は、私の顔を映し出す。そこから見える私の顔は、困惑……。らしい回答すら思い浮かばない。

彼女の顔が、徐々に私に近づいてきた。なんとなく、解答時間を決められているような気がした。

「ち、ちよつと資料取りに行くから……待つてくれる?」

と、私は、本棚の方へ行つた……逃げたというのが正しいか。

「あーっ、逃げるんですか!?!」

やはり、彼女も追つかけてきた。そのうち、私と妖精が島のように独立している本棚をグルグルと回り始めたため、もはや鬼ごっこの形相だ。

しかも彼女は、最短距離で回ろうとするので、よく本棚にぶつけていた。そのため、天井まで詰めた本が、次第にグラグラと揺れ始めて、今にも落ちてきそうだった。それに、彼女は気づいておらず、むしろ加速し続けている。

妖精の反対側——本棚の死角——に入った時に、別の棚に隠れて様子を見ることにした。当然、彼女はそれに気づいていない。目が回ったのか、彼女は追いかけるのをやめて、本棚に寄りかかった。

その時だった。揺れに耐えきれなくなったのか、天井付近にあった本が一気に彼女の方に落下してきた。

「逃げて!」

という、私の声にも反応しない。たまたま、上を向いてしまったせいで、硬直してし

まったらしい。

(あのバカ……!)

私は、すぐさま

「鎖符『懺悔の鎖』」

「巨腕『十二柱の巨人』」

のスペカを発動させ、二本の“腕”を出現させる。その腕で、彼女を抱え込み、私ごと巻きつけた。

(使うのは久しぶりだったけど……)

落ちてきた本は、十数冊にも関わらず、巻きつけてできた鎖の繭によって、ケガせず済んだ。

「あ、あのー……」

どうやら、妖精が正気に戻ったらしいが、何か言いたげだ。

「どうしたの?どこかケガでも?」

「……私の事、強く抱きすぎですよ。ちよっと痛いくらいに」

そういうえば、私ごと巻きつけたという事は、彼女と密着しているという事になる。それに気づくと、次第に恥ずかしくなってきた。しかし、彼女の的には、

「でも、私はずっとこのままでもいいですけどね」

と、OKらしい。

*

鎖を解いた。

「もしかして、あなた、二か月前に起きた異変を解決した人ですか？」

「私も唐突すぎる質問だった。」

「なんでそう思うの？」

「風の噂で聞いたんです。なんでも、『鎖を扱っていた』って」

「……人違いじゃない？」

「と、私は否定したが、」

「……嘘の顔」

「と言われ、あっさり見破られてしまった。これ以上、嘘を重ねても無駄そうだ。」

「……そうね、私よ。私が、みんなの能力を戻したの。でも、これは秘密にしてくれる？」

「何ですか？」

「本当は、チャホヤされたくないのが理由だが、彼女には、命が狙われているからと説明した（現に霊夢から狙われている訳だし）。どうやら、私を尊敬しているらしく、」

「分かりました！私とあなただけの秘密ですね！」

と、気軽にOKしてくれた。気軽すぎて、個人的には心配であるが。床には、落ちて来た本が散らかっている。

「……片付けなくちゃね、『ピース』ちゃん」

つい、口からこぼれてしまった。

「え、今私の事……」

「気にしない、気にしない。さ、やるよー」

私が紛らすと、威勢良く「はい！」と答えてくれた。

「じゃ、この本どこに仕舞えばいいですか、『ぬし様』！」

「又シ……サマ？それって漢字の『主』に様付けしたやつ？」

「いえ、『又シ』は、そのまま平仮名ですよー」

「でも、意味があなたのご主人と一緒になるような……」

「それでも『ぬし様』です！」

「……うーん」

11月6日

いつものように、私がぬし様の^{アタイ}部屋に行くと、ゴソゴソと何か準備していました。

「何してるんですか、ぬし様？」

「これから出掛けるのよ」

「どこへ？」

「ちよつと人里まで」

出会つて1週間も経っていませんが、ぬし様^{アタイ}が人里に出掛けていくのを初めて見ました。

「来た道帰るみたいになるからアレだけど、良かったら一緒に行きましょ。奢るから」
「え!!」

私は声を上げて驚きました。私に対して少し当りが強かったぬし様が、私をお誘いしてくれるなんて！昨日に感謝。

ところで、ぬし様の服装ですが、トレードカラー（かは分かりませんが）のピンクのリボンをあしらった黒の女優帽に、いつもの服装が覆うように黒いポンチョを羽織っていました。別に人里に行くからって、身分を隠すような服装をするのは謎ですが。

私は飛んで、ぬし様は鎖を使って入口から抜け出しました。私は、「競争です！」と言って数秒のハンデをもらってスタートしましたが、それ以上に鎖の飛ばす速度が速く、ぬし様の方が先に地上に出ました。

人里へは、ぬし様は普通に飛行していました。

「そんな格好をすると邪魔になりませんか？」

私が訊ねると、

「別に。このポンチョって意外に通気性がいいのよ」

と、笑いながら答えてくれました。でも、私にはその笑いが、決して心からではないのでは、と微かに疑いました。多分、これを言うどぬし様の過去の探るようで、嫌がる。自分でも鳥肌が立ちました。「飽くなき探究心」とは言えど人を傷つけるような事は控えますよ、私も。

飛行中、私はある気になっていた事をぬし様にぶつけてみました。それは、

「ぬし様は、友人様とどういう経緯で出会ったんですか？」

というもの。それに、ぬし様は答えてくれました。

「うーん……、元々あなたの友人さんのスペルカードが欲しくて、色んな所を回っていたんだけど、中々見つからなくてね……。で、たまたまブラブラしていたご主人さんに、ダメ押しをお願いしてみたの。『純狐さんに会いたいのですか？』って。そしたらOKし

てくれて」

ぬし様は、それを笑いながら話してくれました。

「そうそう……」

と付け足すように、ぬし様は話を続けました。

「あなたの『フェイクアポロ』、かなり強かったわ。今思い出したけど」

「どういうことです？」

「夢創異変で使ってきた人がいたのよ。うまく月を操って、私はもうお手上げだった」
やれやれ、とまたぬし様は笑ってそう言いました。それで終わるかと思いましたが
……、

「だからね……、今度『フェイクアポロ』をもう一回作って、あなたと一回手を合わせて
みたいの。やってみない？」

それは、私を強くさせる、という誘いでした。

「ええ！私も、もつとぬし様の能力を知りたいです！」

いつになるかは分かりませんが、それまでにある程度鍛えておかねば。

再び人里へ向け出発すると、数分でそこが見えてきました。

「ところで、今日は何を買うんです？」

ふと疑問になっている事をぶつけると、

「ノートよ。使おうと思つたら切らしてたらしくてね」

と、笑つて答えてくれました。

ザザツと地面に降り立つと、いつも通りの、活気ある景色が広がっていました。その中を、ぬし様は帽子を抑えて目的地を目指します。

ぬし様が指差しました。

「……(ハ)よ」

その先にあつたのは、村人が営む小さな店でした。

「あの、本屋なら鈴奈庵が……」

私がそう言うと、ぬし様が食い気味に、

「あそこは私が確実に殺されるから、最近行かないようにしているのよ」

と、掴めたように掴めないように答えました。これも、これ以上探つてはいけないうです。

店の引き戸を引きました。

「……いらつしやい。いつもののか？」

店主が問いかけました。

「ええ。いつもありますがどうございます」

店主はそそくさと例の物を探し始めました。その間、ぬし様は私に、

「この人は数ヶ月前に来た外来人らしいの。外界では書店で働いていたらしくて、この文房具は外来製が主なのよ」

と説明してくれました。ぬし様が通い詰めるのも、なんとなく分かります。

店主の彼が、準備をし終わったようです。

「はい。ノート10冊。お代は云々円」

ぬし様はポケットから財布からお金を取り出しました。

「おお、今日はラッキーね」

と呟いたあたり、今日は丁度だったようです。

「はい、毎度あり……ってそっちの娘さんは誰だい？」

そういえば、自己紹介するのを忘れていました。

「あ、私のことですか？私の名はクラウンピース！」

「……クラウンピース？」

「妖精ですよ」

ぬし様が付け足しました。

「そうか……なら」

と、彼はまた何かを探し、机に出しました。それは、表紙が鮮やかに描かれています。

「嬢ちゃんは、『塗り絵』ってのはやったことあるかい？」

私は首を傾げました。すると、店主はペラペラとページをめくってくれました。そこには、打って変わって線画のみの絵が描かれています。

「この線で囲まれた中に綺麗に塗っていくのかが塗り絵っていうんだ。どうだい？色鉛筆と一緒に一冊オマケするよ」

彼はにつこりと笑ってくれました。妖精と聞いて、驚かないのが気にかかりますが、でも……、

「……ありがとうございます！」

面白い遊びを教えてくださいました。これを地霊殿に置いて、より行ける口実が増えますしねー！

「あ、あの、お代は払いますので……」

と、ぬし様は言いましたが、

「いいの、いいの。実際儲かっているし。何のこれぐらい」と気持ちだけ受け取りました。

「なら、ありがとうございます」

「ああ。お前さんには定価で売っているけど、他の客にや2割増しの値段で出しているから、この程度のおマケでも黒字だよ」

「人間も妖怪も、味を知ると落ちぶれるものねえ」

2人は互いに笑っていました。人間と妖怪は、元来仲が悪かったと聞きました。でも、今この2人はそうだった状況を恰も無かったかのように打ち解けあっているように見えました。

「ほれ、もう用が済んだのなら、帰りなさいな」

店主の彼はシツシツと手を振りました。そんな彼に、ぬし様は、

「はいはい。それじゃあまた数日」

と、笑って手を振りました。店の去り際、彼は、

「毎度」

と、挨拶がわりにそう言いました。ドアを閉めた後、ぬし様はこう私に言いました。

「こう見えて、彼も根はいい人なのよ」

帰り際に、何かを焼いている匂いがしました。そっちに目を向けると、和菓子処で団

子を焼いているのが見えました。

(……そういえば)

小腹が空いているのに気がつきました。八つ時は超えているようです。

(でも、迷惑をかけるわけにもいかないし……)

すると、ぬし様が徐に和菓子処に近づき、店員と話し始めました。

「……………ずつ」

何かを終えて戻って来るときには、両手に物を抱えていました。

「はい」

と、手渡されたのは、あん、みたらし、きな粉の三種の団子が入った紙袋でした。

「そういえば、『奢り』がまだだったわね。……全部食べれる？ どうせなら、全種類買ったほうがいいと思つて」

ぬし様はそう言つてきな粉の団子を一つ食べました。

「……ありがとうございますー！」

中からみたらし団子を取り出し、一つ食べます。甘い匂いが、鼻から入つてきました。

「……おいしい」

「フフツ、ならよかった」

ぬし様はまた一つ食べました。

しばらく歩くと、ぬし様の妹、こいしさんが遊んでいるのが見えました。

「帰るわよ、こいし……」

ぬし様が呼ぶのをためらいました。すると、周りを何回も見、確認し終わると再び、

「帰るわよ。こいし」

と、彼女の名を呼びました。流石に二人の世界を壊すわけにはいきません。

「それでは」

私は軽くお辞儀しました。ぬし様は軽く困惑しています。
「いいの？何か悪いわねえ……」

謙遜している様子ですが、口角は吊り上がっています。すると、ぬし様は私の帽子を取り、頭を優しく髪を鋤き始めました。

「フフツ、金髪が綺麗……」

そんな優しくされると、こつちまでニヤけてしまいます。

いつの間にか、妹さんが私たちの元に来ていました。

「おねえちゃん、その妖精誰？」

「クラウンピースっていう妖精よ」

すると、こいしさんが表情を変えて、

「ねえ、まさかおねえちゃんを奪う真似はしないよね。約束してくれる……？」

と、私に対して訴えてきました。彼女の瞳は、酷く濁っています。あまりの狂気に、私は沈黙でしか答えられません。

「ちよつと、止めなさい……。私はあなたこいしが一番だから……」

「おねえちゃんは黙ってて！」

ぬし様が仲裁に入ろうとしましたが、語気を強めて、それを撥ね退きます。

「ねえ、言つてよ……。自分の口から、早く！」

「……ええ。私はぬし様を……さとりさんを奪うようなことをしません。ただただ、尊敬しているだけなんです」

あからさまな誘導尋問なのは、最初から分かっていた事です。しかし、一体何がこいしさんを狂わせたのか、私には理解できませんでした。

私の言葉を聞いたこいしさんは、

「……なーんだ」

と、私に対する興味が失せ、ニコニコしてぬし様の腕に抱きつきました。ぬし様は困惑しています。

「はあ、外で遊ばせているのに、まだ治らないなんて……」

そう呟いて。

「ごめんね……。変な別れ方で」

ぬし様の姿は、さっきとは違って弱々しくなっていました。そして、トボトボと地霊殿の方角へ歩き始めました。

私は、その後こいしさんについて少し考え始めました。何が、彼女を変えたのか？……すぐに思いついた事が、一番答えが近かったような気がします。

「もしかして、夢創異変……？」

11月7日

その日、私はいつもの椅子に座らず、その近くのソファに横たわっていた。正確に言えば、座らなかつたのではなく、座れなかつたのだ。

「アア……、ウウ……」

こんな罰当たりな日は、久しぶりかもしれない。

*

昨日から寝不足である。確かに、こいしと共に帰った後は、早く寝ようと思つて風呂に入り、日記をつけてから就寝した。しかし、しばらくして、こいしが何時もの様に「悪夢を見た」とかでベッドに入り込んできたので、安心させるために優しく頭を撫で、あやした。普段なら、これで寝付いてくれるが、この日に限つて、それに手こずつてしまった。翌朝、妹に起こされて、彼女の身の回りのことを済ませ、出かけるのを見送つてからまたベッドに戻つた。

再び目が覚める。それは、腹痛による目覚めだった。

(うわ……、最悪な目覚めなんだけど……)

そう思つて体を伸ばすと、両足のふくらはぎに激痛が走つた。あまりの痛さに、

「ヴウツ！」

と、私は思い切り悶絶してしまった。

今日は何もやる気が起きなくなった。腹痛も、徐々に大きくなっていく。私は、昨日の夕食を思い出してみた。

（昨日は和食だったはず……あつ）

私は、腕を目に当てた。

（刺身か……）

痛みが多少引いてきた。ここで私は発起して、取り敢えずいつもの図書館に行こうと試みた。まず、自身で浮遊しようとしてみた、が……、

「……ヴウツ、アア……ツ！」

それは、却って足の攣りが酷くなる結果を生んだ。しかし、私は諦めない。

（そうだ、能力を使えば……！）
すぐに、

「巨腕『十二柱の巨人』」

を発動し、鎖の右腕を作り出す。それをドアノブに向かって飛ばす。腕に対してドアノブが小さいので、人差し指を器用に使って、これを下げる。……壊さずに開けることができた。

次に、私は部屋から出る方法を考えた。これに關しては、すぐに思いついた。……ドアを開けたことでできた縁を、腕でしっかりと掴み、一気にそれを引き込んだ。廊下の壁にぶつけてしまうような捨て身の作戦だったが、今はそんなことを考える暇はなかった。当然、私は全身を壁に強打する。

(痛ッ……！後は……！図書館へ飛ばすだけ……！)

痛みに耐えつつ、掴めそうな場所を探す。しかし、廊下にそのようなものは見当たらない。

(しようがない……。石壁に穴が開く程度なら……！)

私は腕を解き、2本の鎖を、図書館のドアを外すようにして、鎖を正面に飛ばす。……木材を射抜く音が響かなかった辺り、しっかりと壁に刺さったようだ。引つ張つて安全を確認し、鎖を引き込む。案の定、ドアにぶつかる。しかも、ドアノブにだ。しかし、(やった……！図書館だ！)

達成感に浸っていた私には、眼中にない。

あとは簡単だった。鎖でドアノブを引き、また石壁へ鎖を飛ばして、調整してソファによじ登るだけ。ついに図書館に到着したのだ。

*

達成感が冷めるも、腹痛と足の攣りは治っていない。足の攣りは、二度食らうと早々

痛みは引いてくれない。下手すると一日かかる。

(今日は安静かあ……)

じゃあ諸々はペットに頼もうかしら、と考えていると、ノック音が聞こえた。

「はいはい」

この時間の来訪者は、大体決まっていた。

「お邪魔します……って、何に魔されてるんですか、ぬし様？」

言うまでもなく、ピースである。

「魔されてる……って、もしかして、音漏れてた？」

「ええ、ドア少し空いてましたし」

しまった、と私は恥ずかしく感じた。

「足が攣ったのよ。運動不足が祟ってねえ……」

私は空笑いした。しかし、ピースは満更でもない様子だ。

「え、ていうことは今日一日は動けないっていう事じゃないですか。私がぬし様を手伝

いませうか？」

彼女は、私の手を優しく握ってそう言った。

「……ええ、お願いするわ」

そう言うと、ピースはすぐ図書館に備え付けたキッチンへ向かい、料理をし始めた。

見ると、時計は既に12時を過ぎていた。

(もう昼時なのね……)

だが、腹痛のためか、食欲は全くない。良かれと思つて調理しているのだろうが、私には必要ない。彼女に断りを入れようか、入れまいか。そう考えているうちに、彼女が私の方に戻ってきた。

「上手に出来たかは、自身ありませんが……」

そう言つて、私の前に1つのお椀を置かれた。私は、起き上がつて確認する。見ると、そこにはトロトロに煮込まれたお粥が入っていた。

「さつきから、ずっとお腹を摩つていたので、もしかしてと思つて……」

ピースは、私の体調を見抜いていた。

「あ、ありがとう……」

意外な対応に、私は驚きを隠せない。しかし、それは心地よいものだった。

差し出された木材のスプーンを使つて、温かいお粥を掬つて口に入れる。あっさりとした出汁味で、病人(?)には優しい食事だ。具材には、卵の他にホタテの貝柱が使われていた。

「ホタテの貝柱ねえ。いいアクセントじゃない」

誉め言葉しか見つからなかった。

「キッチンにあった『ほんだし』って、便利ですね！今日ご主人様に教えようかなあ……」
そう言つて、ピースはもう一つのお椀を取り、スプーンを持って食べ始めた。

「あなたって意外に料理とかするのね。驚いたわ」

「ええ。興味があつて、週に何回かはご主人様に教えてもらつてるんです！」

ピースは、誉められて体を横に揺らす。何とも微笑ましい光景だ。

スプーンは、自分でも驚くような速さで進んだ。腹痛は、行くも地獄、退くも地獄。どうせなら、行つたほうが解決が早い。これは、その起爆剤だ。

お粥は5分足らずで完食した。

「どうですか、お腹の調子は……？」

「ええ、だいぶ楽になつたわ」

実際に、腸内が回り始めた感触はあつた。足の攣りも、辛うじて歩けるくらいには回復した。私は、ゆっくりとソファから起き上がり、重い足を引きずつて図書館を出る。

「さて、長い戦いに赴こうかしら……」

10分くらいかかったのであるうか、長い戦いからついに脱すことができた。

図書館に戻ると、ピースが私の机上を整理していた。

「あ、机の上が散らかつてたんで……つい」

「だ、大丈夫よ。むしろ、ありがたいわ」

日記は引き出しにしまつてあるし、他に隠すものもない。ガサツだったので、助かつた。

「では、続けてますね。……ぬし様は休憩しててください」

「え……いや、もうだいたい調子が戻ってきたんだけど……」

「安静が一番です」

言葉が詰まる。このまま、あの妖精に家事云々を任せてよいのだろうか。——いや、考えるのは止めよう。お言葉に甘えて、私は少し彼女に甘えることにした。

私は、ソファ前のテーブルに指をさす。

「じゃあ、ここにある本を片付けてほしいな」

「分かりました！」と言つたのと同時に、数冊本を積んでから、本棚へ戻していく。

「適当に入れてつていいから」

迷いを無くすよう、念を押す。

しつかりと意が通じたようで、ピースは問題なくやつてくれた。彼女が、近くにやつてきて、

「できましたよー！」

と、脱帽して顔が迫ってきたので、

「そう……、ありがとう」

と、頭を撫でた。やはり、思わず笑みを浮かべてしまう、綺麗な髪だ。
(こういう日も、悪くはない……)

*

図書館の読書スペースは、十分に綺麗になった。

「……今日は、本当に助かったわ」

私は、少し起き上がり、再度礼を言う。すると、ピースが妙なことを言った。

「いいえ、ぬし様は、ご主人様たちと同じ『家族』ですから！」

「はて？」

私は疑問に感じた。一応、一つ尋ねてみる。

「それは、私だけって事？」

ピースは、首を横に振る。

「フフツ、何言ってるんですか。妹さんですよ」

「そう……、なら良かった」

どうやら、杞憂でしかなかったようだ。

時計を見ると、既に5時を過ぎていた。

「そろそろ帰ったら？もうそろそろこいしも帰ってくるし。きっと後はやってくれるわ」

「そうですか。では！」

ピース脱帽したまま礼をして、図書館を後にした。ドアが閉まったのを確認し、私は、また寝込む。

「本当に……よくできた娘ねえ……」

11月9日

4日辺りだったであろうか、紅魔館のレミリアから、直々に手紙が届いた。どうやら、彼女の住む紅魔館へ、直接来てほしいという。妹の世話もやってくれらるというので、その手紙に書かれていた予定日である今日の朝に間に合うよう、前日の夜に、妹を連れて地霊殿を出発した。

「大丈夫なの？一晩中飛ぶことになるけど」

と、こいしに尋ねると、

「全然！だってフランちゃんと遊べるんだもん！」

と元気に答えてくれた。まあ、長い昼寝を促したので、寝てしまうことはまずないだろう。

到着したところには、既に明けの明星を迎えていた。紅魔館の門番を務める美鈴は、例の如く立ち寝をしている。そこに、瞬間で紅魔館のメイド長である咲夜が、私の目の前に現れた。門番は、ナイフを刺されて倒れている。

「お待ちしておりました。こちらへ」

彼女の案内に沿って、私達は、紅魔館の建物内に入っていった。途中、フランの部屋

が見えてきたので、こいしとは、そこで離れた。

「それでは、私は妹様たちの面倒を見ておきますので」

部屋に入る前、咲夜がそう言つて、私の前から姿を消した。

案内された部屋に入ると、レミリアがいた。

「フフツ、ようこそ紅魔館へ」

彼女は、歓迎の意を述べた。

「何となく、話は分かっているでしょう」

「さあ、何の事でしょう？」

私は、あえて知らないふりをする。

「手紙には、『ここに来てほしい』という旨しか書いていなかった。それだけで分かるだけでも?」

冗談を含めて、私は嘲笑する。彼女は、それを笑いで返す。

「アツハハハハハハ! 確かに、それだけじゃ常人には分からないわねえ……『常人』には
私は、愛想笑いでそれを返す。

「ハハ……あたかも、私が『常人』ではないかのような言い方ですが?」

「そよ」

急に、彼女の目つきが変わる。

「話を変えるけど……、何故あなたはそのポンチョを脱がないのかしら？」

内心、動揺するも、表面上は平然を保つ。

「ここが少し寒いからですよ。なんでも、冷え性なもので」

「冷え性？」

（まずい。もつと突っ込んでくるか……？）

そう考えていると、

「……そう。吸血鬼には、これぐらいがいいんだけどねえ」

と、あつさりとその話を切り上げた。

「まあ、いいわ。そんなのはどうでもいいわけで……パチュリーが、あなたに用があるらしいの」

そう言うのと、立ち上がって私を先導し始めた。

*

到着した所には、大きな二枚扉が佇んでいた。

「さあ、入るわよ」

ギギギツ、と開いた先に、彼女の親友はいた。

「……ついに、来たのね」

鋭い目つきを私に向けた。

「この人がパチュリーよ」

「『パッチェさん』って呼んでほしいわ」

「は、はあ……」

いぎ、この二人の視線を食らうと、少々威圧感を感じるのは私だけであろうか。まあいい。

私は、両手をポケットに突っ込んで、こう問うた。

「で、では……パッチェさん。一体私に用、とは？」

小休止入れて、パチュリーはゆっくりと話し始める。

「最近、幻想郷でちよつとした謎があつて……。夢創異変を解決したのは誰なのか、が分かっていないのよ」

（また、いつもの……）

そう考えながら、彼女の話を聞く。当然、その後には鎖を使っていた云々が続いた。

「へえ。それで、私を。けど、関係ないですよね？」

私は、空笑いする。

「しらばつくれるつもり？」

パチュリーは笑い返す。

「なるほど。最初はなつから私を疑っている……と」

「ええ」

彼女の目線が、また強くなった。

「レミイから聞いた話によると……、異変発生後、あなたは滅多に來ない会合に姿を現した。そして途中から、靈夢が私たちの能力を申告しろ、と滅茶苦茶なことを言ってきた」隣にいるレミリアは、2度頷く。

「あの場にいたほとんどの人妖は、能力を暴露したと言っていたわ。もちろん、レミイ^{彼女}でも、その尋問でさえ、はつきりとした答えが出なかつた妖怪がいた。それが——」パチユリーは一呼吸置く。

「——それが、あなたよ」

私に、人差し指を突き付ける。まずい。ピースのような直感で話していない。

「……なら、確実な証拠つてありますよね？見せてくれませんか？」

「証拠？そんなの、今はないわ——これから作るのよ」

そう言うのと、素早く弾幕を展開し、私に向かって放つてくる。全て自機狙いだ。

（まずい、避けなければ……！）

動こうと試みるも、地面が足を離してくれない。足が、効かない。

（あの吸血鬼、運命を……！）

彼女がずっと留まっていたのも、それが理由か。

私は、ため息をついた。どうやら、諦めないといけならしい。

「はあ……」

鎖を出現させ、ポケットから取り出したスペルカード、

「双剣『洗礼と靈魂の鎖』」

で、双剣を作り出す。剣は、白い気を帯びている。

できた双剣で、私は一つ一つその弾を斬り裂いていく。十数個あった弾は、1分もかからずに全て消えた。これを見たパチュリーは、私に拍手を送った。対し、私は不快感しか残らない。

（見た事あるな……こうやって窮地に立たせて正体をばらす展開。馬鹿げてる）

正に「してやられた」わけだが、今更、開き直る必要はない。

「ふーん……概要がつかめない能力ね……。面白い」

パチュリーは一人で声を漏らす。

「確かに、あの異変を解決できるような能力ね」

レミリアは、腕を組んで納得していた。私は、これに愛想笑いで対応した。この二人は、どうも面倒くさい。

*

私が、近くの椅子に座ると、パチュリーは、また話し始める。

「んで、私があなただを呼んだのは、これをやってほしくて……」

そうやって、差し出したのは、私も持っている「幻想郷七不思議全録」であった。

「私も持っていますけど、これがどうしたんです？」

「あなたには、七不思議しちふしぎの検証をしてほしいの」

背筋に、何か冷えを感じる。

「は、はい？ せいぜい都市伝説程度の七不思議を、検証……？」

正気なのかと、もう一回問う。

「ええ。これを熟読していくうちに、現実味が帯びてきたの。確かに、最強のスペルカードは存在するだろうし、外界へも、理論上はほとんどが出れないわけでもない。なら、それを止めているのはいったい何なのか？」。これを突き止めてほしいの」

「だったら、何故私が？ 大体、自分で動けばいいものを——」

「自分は……動けないの」

パチュリーが、食い気味に、そして語気を強めた。

「……七不思議は、便宜上の名前で、真名は『幻想郷禁断探求』。絶対に真実を求めてはいけない。実際に、これを書いた作者は、罪悪感から自殺したと言われているわ。しかも、幻想郷の根幹に関わる以上、博麗側に比較的明るい紅魔館私たちには、無理があるの。対して、地底世界あなただちは、多少の監視はあるものの、博麗側からは遠い陣営。禁断探求の〃探

「求」は十分に可能なはずよ」

「で、でも、あなたの興味本位に、私が巻き込まれるのは、極めてリスクが。それとも、その『禁断探求』と私とが関係あるのですか？」

「そこなのよ。あなたを呼んだ理由は」

急に指摘され、私は冷や汗を掻く。

「まず、さつき見せてもらったあなたの能力は、あな一たの《》能力ではない。その証拠に、本来弾幕を展開するためのスペルカードが、あなたの限っては武装するものとなっている」

「私の……能力ではない？」

「少なくとも、夢創異変が解決してもなお、その状態なのは、問題視すべきね」

あたかも、私が異端のように言われている。その所為で、私は聞き手にしか回れない。

「誰かから、手が加わった能力という可能性は、大いにあるわ」

「その、抑えている張本人が、『禁断探求』に触れるかもしれない、と」

背中に感じる悪寒は、次第に強くなっていく。自分の人生の岐路が、すぐそこにある事を示しているのだろうか。

「……やってくれる？その代わり、あなたの安全は保障するわ」

「という、私の『能力の機密保持』という事ですか？」

「そういうことよ」

確かに、私は岐路に立たされている。どうやら、夢が朽ちた先には、「劣勢のまま生き続ける」か「より一層落ちぶれる」の選択肢しかなかったようだ。どちらにせよ、最善手はない。なら、答える選択肢は……、

「——分かりました。では」

私は、パチュリーと握手をした。思えば、夢創異変時と同じ回答の仕方だ。

「交渉成立ね。期待してるわ」

レミリアは、私たちを見てホツとしたようだ。つまり、最初から仕組まれていたという事のなのだろうか。

私は、今日最悪な一手を指してしまった。この先、どんな事があるかと、元には戻れない。だが、私にはどうでもいい。何せ、既に夢は朽ちているのだから。

11月15日

その日、私はいつも通り、ぬし様の図書館へ入りました——元気な挨拶をして。すると、ぬし様を見て気付いた事が、一つ。

(ん、口に啞えているのは……?)

直感で、見てはいけないものを見た気がしました。ぬし様の口に、た、タバコが……。ん、どうかした?」

「い、いえ。何でもありませんよ……」

ま、まさか、ぬし様は「ヘビースモーカー」っていうのじゃ……? 健康体とと思っていましたが、「タバコ」という嗜好物を持つていたとは。なんか失望しました。

(い、いや待てよ……。今まではただの思い込みだったんじゃない? なら、これはただの空回りなわけだけど……)

混乱して、視点が定まりません。

そこで、私は一旦その場を離れ、気持ちを整えようと試みました。

「ちよつと……、ジューズ取ってきていいですか?」

「……?別に構わないけど」

とりあえず、私は、少しぬし様から離れて、心を整えることにしました。

冷蔵庫から、オレンジジュースを取り出して、コップに注ぎます。注いだ分は一気に飲み干しました。

結論から言うと、ダメでした。

(信じられない……、信じられない……!)

台所にあつた椅子に座つて、私は頭を抱え込みました。むしろ、考える環境を自分で与えてしまったのです。

(あー……自分の首絞めたわあ、これ)

椅子の前脚を浮かし始めました。

(やっぱ、直接聞いた方が早かつたかな……)

すると、視界が、ひとつだけ扉が閉まっていない収納を確認しました。

(……閉め忘れたのかな?)

その扉を開けると、白い小箱がギツシリと入ってありました。

(何だろう……これ?)

「……ん?なんか閉め忘れてた?」

「ひゃえ!!」

ぬし様もやってきました。驚いて、まともな返事すらできません。

「あ、あの……これって……？」

私は、指先が震えつつ、白い小箱を指しました。

「この“菓子”？」

ぬし様は、口に唾えていた“菓子”を噛み切って、こう言いました。

「ココアシガレットよ」

「ココア……シガレット？」

ぬし様は大笑いしました。

「私が、煙草を吸っていたと？そんな、確実に不健康になる物を私は嗜まないわ。それに、こいしとかあなたにすぐバレるだろうしね」

「じゃあ、なんでココアシガレットを……？」

「いやあー、煙草は吸いたくないけど、煙草を吸う姿に憧れてね、不健康にならない方法を探ったら、これにたどり着いたって訳」

箱の中から、ココアシガレットを取り出して、ぬし様はそう答えました。

「これも、別の意味で不健康になるけど」

そう笑いながら。

「これね、外界製なのよ」

待ってました、と言わんばかりの説明。

(こういう姿も、珍しいなあ)

何となく、微笑ましい気もします。

説明が止まりそうになかったので、私は、人差し指を立てました。

「——一本、貰っていいですか？」

話を遮ってしまい、分が悪い気もしましたが、ぬし様は、

「一本と言わず、何本でも。何せ、ただのお菓子だからね」

と、不快を感じていないような、純粋な笑顔で、一本手渡してくれました。

とにかく、ぬし様らしい感じで内心ホッとしました。

11月16日

その日、例の如く図書館に訪れると、帽子置きを見て、何か悩んでいました。

「あのー、地上に出かけるんですか？」

ぬし様は、肩をビクツとしながらも、平然を保ち、

「いいえ、地底で済むから、服装に迷ってね」

と、振り向いて答えてくれました。

「え？いつも、身分女僕帽と黒ボンチヨのを隠すような恰好じゃないんですか？」

「ええ。煙たがられるけど、多少は」

「まあ……昔は嫌われていたって聞きましたし……」

「これを言うのと、ぬし様は顔をしかめました。」

「昔は？今もではなくて？」

「やはり、そう来たか！」

という具合に、私アタイはこう答えました。

「今は一人増えたじゃないですか——少なくとも、私が！」

ぬし様は、若干対応に困りながらも、

「……ええ、そうね」

と、笑顔で頷いてくれました。

(よかった、大分私も認められてきてきたのか！)

しかし、ぬし様の顔は歪んだままです。そこで、私は思い切って一つ提案をしてみました。

「だったら、着てけばいいんじゃない。迷っているのは、らしくないですよ」

ぬし様は、少しためらいましたが、

「……それもそうね」

と、帽子とポンチョを装備して、私と共に図書館を後にしました。

地底世界は、地霊殿に向かう道中に、常々、異様な雰囲気を感じます。まさに『異世界』の言葉がふさわしいです。

「こんな世界より、地上の方が楽しいでしょう？」

ぬし様は、そう言って空笑いしました。

「いえ。常に暑くて、むしろ好環境ですよ」

望ましくない回答をしてしまったのか、ぬし様は、キョトンとした後、

「そ、そう……なの……」

と、卒ない返答をしました。

（そんなに嫌いなのかな？自分の住む地が）

私を察したのか、すぐに、

「安心できるのは、地霊殿自分の家だけ、だから……」

と弱々しいながら、補充しました。

市街地は、紐で連なった提灯が、大通りを煌々と照らしてくれます。

「地下なのに、随分と明るいですね」

「まあ、逆に地下だから、ここまで照らさないといけないだけどねえ」

ぬし様は、優しく微笑んでくれました。

「これも、ぬし様の施策で？」

「……まあ、そんな感じね」

ぬし様は、何か後ろめたい顔をして、そう言いました。

その後、ぬし様は食材の類を買っていきました。その最中、私は地上での出来事と照らし合わせ、違和感を覚えました。

（あれ、そう言えば、ぬし様の顔が、笑ってない……）

ぬし様なら、お世辞でも笑うはず。ここまで無表情なのは、故郷のはずなのに、それを歓迎していないようでした。

*

帰っている途中、ぬし様が唐突に口を開きました。

「もしかして、分かった？私が嫌われている理由」

重い空気に、私は、黙り続けるしかできませんでした。すると、ぬし様が、笑みを零しました。

「私ってね……フフツ、上にも下にも嫌われてるのよ。能力で」

「え、でも、その能力つてもう——」

「風評被害つて知ってる？」

食い気味に話す——もしかしたら、何かを紐解いたのかもしれない。私は、ただただ、それに怯えています。

「一度ついた印象つて、何か自分で行動を起こさないと変えられないの。でも、『鎖カを操ネる程度の能力』を秘密にしておかなければならない。——ジレンマを抱えてるの、私」

「ぬ、ぬし様——」

「いいのよ。今から嫌になっても」

暫く、沈黙が続きました。確かに、いくら異変を解決したとはいえ、性格までは変わらない。多少自己嫌悪に陥ってもおかしくないはずです。はつきり言って、ぬし様は根暗です。しかし一方で、何かに向かうような意志も感じて……。多分、それに私は惹か

れたんだと思います。今まで感じたことのない、未知の「好奇心」に。

「——前評判なんか、どうでもいいんです。」

「え？」

「私は、前評判からは大きく「性格が変わった」、そう信じます」

「……ピース」

まだ信じ切っていないようだったので、私は、そこに更に念を押しました。

「ほら、今日は忌避されてませんでしたよね!？」

結果は、良い方に転がりました。

「……それも、そうね」

ぬし様は泣きかけつつも、それを抑えて笑顔で答えました。

ぬし様との関係が成熟したと感じた瞬間の1つでした。

11月17日

「16日に休みを作った。サグメと共に食事会でも催そうではないか」

確か、数日前にそんな事を言われた気がしたので、その日は定時で仕事を終わらせ、早く就寝した。

どうやら強制的に繋がれたようで、気がつくくとドレミーが何かを準備していた。私のことに気づくと、ドレミーは私に一礼する。

「これはこれは。覚えてくれていて何より」

「あなたが何も言わずに記憶を繋ぎ止めていたせいよ。まあいいんだけど」

私はため息をする。

そして、私はいつもの事を言う。

「さて、煙草一箱とライター」

私は手を差し出す。すると、ドレミーは指を鳴らし、差し出した手に希望の物を出現させた。私は、手慣れた操作で煙草に火と灯し、それを啜え始める。

「はあ……、ここに来るといつもそれ。どうにかならない？」

「依存してないから、すぐ止めれるわ、多分」

「それ中毒者が言うセリフ……」

ドレミーは呆れていた。それを気にせず、私は続ける。

「それに、現実世界でそんな事始めたら、それこそ中毒になりかねないし、何せこいしに『お姉ちゃん、口臭くない？』なんて言われたら、すぐに剣生成して自分の首ぶった斬るわ」

そう言い、私は溜めた煙を吐いた。

「……いい加減、シスコンって言うのを認めたら？」

「断じて違う」

煙草を人差し指と中指で挟み、否定する。

「はあ……、これだから『夢性格』は」

「その夢性格は意味が違うでしょう……？」

既に呆れ返っていたドレミーをさらに困惑させ、頭を抱えられた。そんな顔を見て、私は煙草を蒸し、吐く。

「まあ、あなたのことだから、自分の嗅覚を一旦殺してるんでしょ？」

「へいへい。ご明瞭さん」

私の言葉が、彼女をさらに呆れさせる。

後々やってきたサグメを含めた、3人での会食が始まる。

「さあ、アリスのティーパーティーをば」

『終わらない』のはナシにしてよ……」

サグメは、ドレミーの冗談を苦笑いで返した。

ドレミーは、夢創異変で対峙した。この時は、まさにエンターテイナーに相応しいような過激さを持つていたが、異変後、話す機会ができた時は、かなり気さくな人だった。何故か、と問いかけたところ、

「ああ、それは少し有頂天になっていた」
かららしい。

一方のサグメも、その異変の主犯であった。ただし、正邪に操られていた節もあるの
で、実際は、「加害者であり、被害者」というものだった。彼女は、正邪と同じく「扇動
する程度の能力」を持っていた。ただし、対象は人妖ではなく、人妖以外の生物であっ
た。元能力（つまりは現在の能力）が似ているので、それを聞いた時、「ああ、なるほど」
と私は深く関心したものだ。

そんな彼女は、以後数週間ではあるが、自宅で自発的に謹慎をした。部下たちに、そ
の旨を伝えると、意外とすんなりいったらしい。しかし、「謹慎」とは名ばかりで、実際
には月をあちこち周っていたらしい。本人曰く、
「こういう時間があっても悪くはない」

との事。

今回、ドレミーが茶会を開いた訳。それは、3人で互いに情報交換をするため。逆に言えば、3人で集まるときは、決まって茶会をする。サグメは月社会、ドレミーは表社会。そして私は……裏社会の代表として。

「ていうか、何で裏で生きてすらない私が、裏社会代表な訳？」

ドレミーは、笑いながら、それに答える。

「何で、で……そりや、幻想郷の禁断探求に触れるんでしょ？その時点で表社会から蹴られたのも同然でしょ」

「まあ、元から表社会でも、生きた心地しなかつたけど……」

「え、さとり……貴方、幻想郷の掟破ろうとしてるの？」

どうやら、サグメはこの事は初耳だったようだ。

「そうよ。自分の能力の正体を探るためには、ここを通らざるを得ないのよ」

「あー、もうそりや八方塞がりですわ」

ドレミーは、頭を抱えて笑い始める。

「……笑い事じゃないんだけど」

「分かつてる、分かつてる」

と、ドレミーは言うものの、笑い声は止まる事を知らない。何ていうか、馬鹿にされ

ている気がする。

「もうそろそろ、止めたら？さとりも、じきにベそをかき始めるわ」

手を差し伸べてくれると思ったら、なんとドレミーの冗談交じりの貶しに加担した。

「2人して蔑むのは止めてくれる……？」

サグメも、ドレミーの話に完全に乗っていた。この2人、気が合うどころか、親友以上の何かだ。

そう言えば、とドレミーが人差し指を立てた。

「何故、自分の正体を既に知っているのに、わざわざ幻想郷七不思議を解明するのかい？」

私は、目の前の肉料理をナイフで切って、口に入れる。そして、飲み込んだ後、こう話す。

「パチュリーにも頼まれたのよ」

「ん？その意、とは？」

ドレミーが疑問を呈す。

「あなたにしては、掴めない話ね。多分、奴にも意図があるはずなんだがなあ」

サグメの方に目を向ける。彼女は、ただ黙って頬杖をついている。緋い目は、冷たく私を見ている。

「今の私の能力って把握してる？」

自分でも驚くくらい低いトーンの声を出し、ドレミーに質問する。

「質問を質問で返すのは馬鹿馬鹿しいがな……」

と、彼女は答えを出し渋るが、

「そりゃ、『心を読む程度の能力』だろう？」

と、語気を若干強めて答えた。

（やっぱり、いくら夢の管理人でも無理ねえ……）

と、私は内心、軽蔑した。しかし、これは、私の求めていた答えでもある。

「……今の私は、過去の私ではないの」

はて、とドレミーは理解が追い付かない様子だ。

「それは、まだ鎖の能力を持ったままっていう事？」

サグメが鋭い目のまま、私に問いかける。私は、それに頷く。

「私の能力変化が、あなたたちの異変を起因としたものではなかったのよ」

「ほう……。あの時は、能力享受の時によく起こる『似た能力の発生』かと思っただが、ま

さかの奇遇だったとはね」

ドレミーはケラケラと笑った。しかし、サグメは表情が曇ったままだ。

「ならさ……」

彼女が口を開く。

「それを証明するようなものはないの？」

何を言っているのか、という顔を見ると、ドレミーは顔をしかめる。

「?あなたが今、鎖の能力を持っている証拠を」

「はあ……?情に訴えてるのに、客観証拠が必要な訳？」

「そりや、夢の中だから。ねえ？」

サグメが、ドレミーに目を配ると

「まあ、大抵の言ってることは信頼してないね」

と、それに同調した。やるせない気持ちに、軽く舌打ちした。

証拠になるかと思ひ、第三の眼サードアイを覗く。見ると、眼は以前の姿を保っていた。どうやら、自分の思い込みが激しすぎるようだ。

予定調和には、至らなかった。

急に、食欲(?)が落ちた私は、急に肩身が狭く感じ始めた。

「ちよつと……、今日はこの辺にしとくわ。なんか、気分が悪くなった」

ドレミーとサグメは、揃って首を傾げるが、

「そう。なら」

と、快諾した。

おそらく、彼女らにとっては、当然の事であろう。しかし、私——大多数は不快に感じるであろう。まあ、夢界という特殊環境というのものもあるが。

私は、席を立ち、起床の方向へとトボトボ歩き始めた。

気づくと、そこは私の寝室だった。時計を見ると、まだ5時すら指していない。

最悪な目覚めだ。